

## 第7章 考察

### 第1節 坂長村上遺跡出土の縄文時代草創期資料について

#### はじめに

鳥取県内には、これまで縄文時代草創期に関連するとされる資料、37遺跡42点が知られている（光石2005ほか）。鳥取県で当該期資料が扱われたのは、1922年に梅原未治氏によるものが初現である（梅原1922）。その後、亀井熙人氏や野田久男氏によって県内出土の尖頭器類が集成され、形態的特徴および分布状況が示された（亀井1971、1972、1977、野田1977、1984）。根鈴輝雄氏は、尖頭器類の分布、技術形態学的特徴、利用石材に着目し、山陰地方における諸特徴をまとめている（根鈴1991、1998）。その中で根鈴氏は、「有舌尖頭器」について基部の形態的特徴を整理し、「有舌尖頭器」が大山北麓・西麓・松江平野に集中することを指摘した。また、採集品や単独出土品が多いことを課題に挙げ、技術形態学的な視点からの属性分析をさらに進めていく必要性を説いている。その後、2004年に根鈴氏が中・四国地方の資料の様相をまとめ、また、2005年に光石鳴巳氏が本州西半部の資料集成をおこない（光石前掲）、再び研究の気運が高まりつつある。

鳥取県内出土の資料は表面採集や遺構埋土中から出土したものが多く、層位的にまとまって出土した事例はほとんどない。それに対し、このたび坂長村上遺跡で出土した尖頭器を主体とする石器群は、黒褐色土とローム層の漸移層から出土しており、非常にまとまった良好な資料といえる。

ここでは、坂長村上遺跡から出土した石器群について、形態、技術などから特徴を整理する。また、他の遺跡から出土している石器との比較検討を通して、鳥取県下における当該期資料を再検証し、当該期の様相に迫りたいと思う。

#### 1. 坂長村上遺跡出土資料の特徴

第5章第2節で概要については既に報告しているが、ここでは坂長村上遺跡出土資料について、形態的特徴、技術的特徴、石材の特徴を整理し、より詳細に見ていくこととしたい。

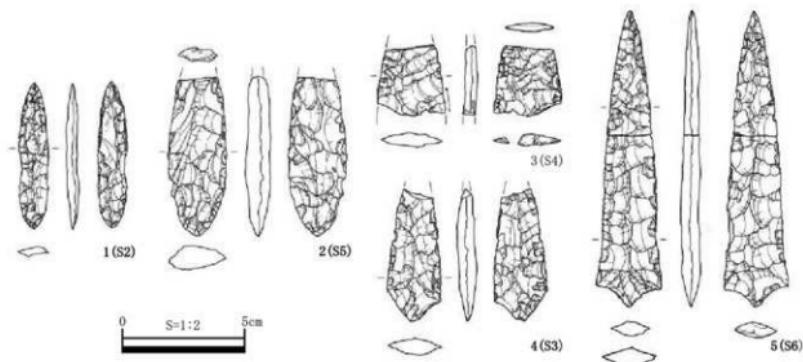
##### (1) 形態的特徴（第88図）

細くて柳葉形を呈するもの（1）、木葉形を呈するもの（2）、中型で茎部を有するもの（4）、大型で茎部を有するもの（5）など様々な形態のものが混在する。いずれも先端及び側縁（刃部）が鋭利で、特に4、5のような有茎尖頭器<sup>(1)</sup>は刃部が非常に鋭利で直線状である。

有茎尖頭器の平面形態について、4は茎部の右側縁が内湾し左側縁が直線状を呈すのに対して、5は茎部の左右両側縁が内湾し非常に整っている。形態に違いが認められる一方で、最大幅、最大厚が茎部の付け根付近にある点と、茎部の最大幅が2.2～2.6cm、基部端部から最大厚を持つ部分までの長さが1.5～1.8cmと法量的に規格性が高い点は特筆できる。また、両側縁の刃部を正面観、側面観とも直線状に整えている点も重要である。3は破損のため全体形が不明であるが、刃部の鋭さや形状は有茎尖頭器と共通点が多い。

##### (2) 技術的特徴

1は裏面に大きな剥離面を残すが、全体的に押圧剥離で調整<sup>(2)</sup>し、刃部を鋭く整えている。2は全



第88図 坂長村上遺跡出土尖頭器実測図

体を打撃によって調整し、周縁を細かい打撃で形成する。押圧剥離を用いない。3は全体に押圧剥離を施し、鋭い刃部を形成する。4と5は打撃によって調整した後、茎部の形成をおこない、押圧剥離や細かい剥離によって鋭い刃部を形成する。全体的に「横断面を平滑で薄い凸レンズ状に仕上げること」、「直線的で鋭い刃部を形成すること」に意識が払われており、打撃によって調整する段階と刃部を鋭く仕上げる段階が認められるなど技術的な共通点が多い。

2に押圧剥離が認められずにやや厚みがあるのは、石材の目が強くて技術的な限界があったのかかもしれない。これは、ヒンジやステップなど剥離末端の反転事故が各所に認められることや、周縁を細かな剥離によって形成して鋭い刃部を得ようとする意図が認められることから垣間見られる。

4、5の有茎尖頭器は、打撃によって調整する段階で茎部の付け根付近に最大幅と最大厚を持つようにした後、刃部を形成する段階に至る。形態的特徴とあわせて考えれば、先に挙げた2つの特徴の他に「茎部の付け根付近に最大幅と最大厚を持ってくること」も有茎尖頭器の特徴として挙げられる。

### (3) 石材の特徴

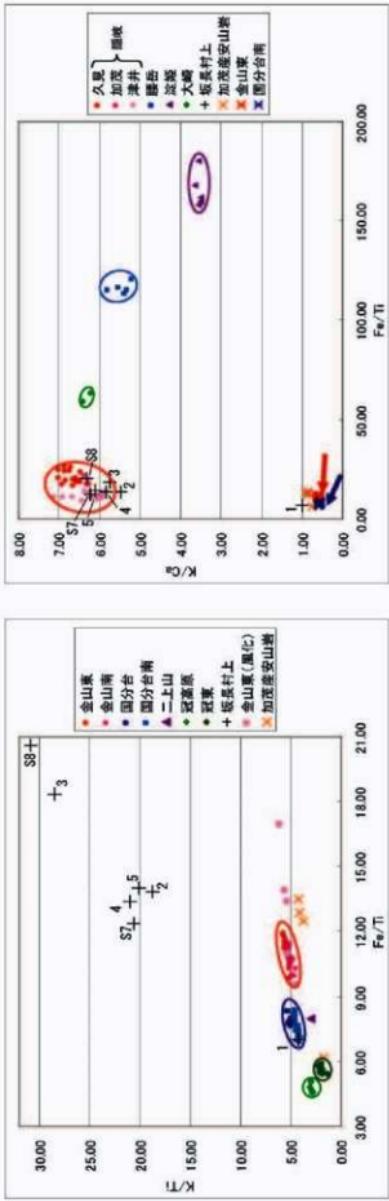
鳥取大学名誉教授赤木三郎氏による肉眼観察の結果、「黒曜石」「ガラス質安山岩」「無斑晶安山岩」「緻密質安山岩」の4種の石材が利用されたことが判明している。これらの多様な石材がどこから持ち込まれたものかを検討するため、岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏に協力を仰いで以下のとおり分析をおこなった<sup>(3)</sup>。

**分析方法** 分析対象資料を超音波洗浄機で水洗し、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーアイノスツルメンツ社製SEA2010L）を用いて20元素<sup>(4)</sup>の成分比を測定した。風化の影響を出来るだけ抑えるため、3回測定した平均を測定値とし、第18表に示した。このうち、黒曜石はK/CaとFe/Ti、安山岩はK/TiとFe/TiのXY散布図を作成し、分析値の比較をおこなった。分析値の比較資料は、白石純氏提供のものを利用させていただいた。

**分析結果** (第89図) 安山岩との成分組成比較では、国分台の範囲内に入る1を除いて、いずれも既知の原産地から大きく外れる。また、風化との因果関係を調べるために金山東で採集した原石の風化面を測定したところ、Fe/Ti値が増加する傾向は見られたものの、2～5、S 7<sup>(5)</sup>、S 8ほどの重

第118表 坂長村上遺跡出土資料分析値一覧表(%)

資料No.	Si	Ti	A1	Fc	Mn	Mg	Cu	Nu	K	P	Ba	Ca	Ni	Pb	Rb	Sr	V	Y	Zn	Zr	Hf
1 (S 2)	66.9985	0.70573	16.86059	4.96951	0.11616	1.21419	3.50623	2.51066	3.04286	0.10931	0.34075	0.10931	0.00035	0.00087	0.02918	0.01100	0.00000	0.01857	0.01650	0.01234	100.00000
2 (S 2)	70.06139	0.25616	15.94889	3.54180	0.10027	1.31975	0.57874	2.53832	4.80960	0.0614	0.02161	0.00075	0.00016	0.00011	0.04919	0.00029	0.00000	0.00001	0.00026	0.00977	100.00000
3 (S 4)	74.11544	0.18660	13.61313	2.72962	0.09414	1.29291	0.72559	2.89584	4.72356	0.12073	0.03512	0.00039	0.00016	0.00000	0.05383	0.00053	0.00000	0.00011	0.01518	0.01796	100.00000
4 (S 2)	66.73287	0.21340	17.16162	2.85883	0.07944	1.76069	0.83770	5.63574	4.49044	0.06102	0.02289	0.00042	0.00017	0.00017	0.00014	0.00020	0.00019	0.00070	0.01716	0.08818	100.00001
5 (S 6)	70.00800	0.25253	15.38513	3.53401	0.09514	1.23560	0.83075	3.20580	5.06928	0.03699	0.04265	0.00037	0.00011	0.00040	0.03145	0.00039	0.00012	0.00111	0.01985	0.10283	100.00000
57	69.44003	0.24446	16.79423	5.02872	0.07651	1.21055	0.80721	2.79462	5.05053	0.07656	0.03607	0.00072	0.00013	0.00024	0.06112	0.00064	0.00148	0.00765	0.01044	0.00004	99.99999
58	74.30056	0.13935	13.42216	2.80589	0.08562	1.16166	0.86794	2.26018	4.21229	0.10671	0.04394	0.00038	0.00018	0.00003	0.00000	0.00088	0.01245	0.00737	100.00000		



第8-9図 坂長村上遺跡出土資料と各石材成分組成比較

## 第1節 坂長村上遺跡出土の縄文時代草創期資料について

離は見られなかった。黒曜石の3、S8が最も離れた位置にあり、2、4、5、S7は安山岩と黒曜石の中間的な様相を呈し、比較的まとまっている。一方、黒曜石との成分組成比較では、1を除いて隠岐産（久見、加茂、津井）付近にまとまりを見せる。これらから、①1以外は、金山、国分台、冠、冠東、二上山から持ち込まれたものではない、②いずれの資料も腰岳、淀姫、大崎から持ち込まれたものではない、③1は国分台から、3、S8は隠岐から持ち込まれた可能性がある、と判断できる。

このように、3種以上の石材が同時に利用され、さらにそのうちの2種が四国や隠岐という遠方からもたらされた石材であるとすると、石材の動きを考慮する上で非常に意義深い。

### （4）小結

坂長村上遺跡出土資料は形態に様々なバリエーションがあるが、「調整する段階→鋭い刃部を形成する段階」という共通の技術的特徴を有しており、できるだけ刃部を直線状に鋭く製作しようとする意図が認められる。また、有茎尖頭器に絞ってみると、形態的差異が大きい反面、茎部の法量には規格性が認められ、茎部に着柄の機能を考える際の重要な要素になると考えられる。また、「横断面が平滑で薄い凸レンズ状」「直線状で鋭い刃部」のほか、有茎尖頭器の特徴として「最大幅・最大厚が茎部の付け根付近」にあるという点を挙げることができる。

石材は、黒曜石、ガラス質安山岩、無斑晶安山岩、緻密質安山岩と多様である。黒曜石は隠岐産、ガラス質安山岩のうち1点は国分台産の可能性があり、広域で使用された石材がもたらされたことを示唆している。これは、先に見た技術的特徴とともに石材の調達方法に関連して大きな意味を持つており、原産地周辺でどの程度まで加工されて搬入されたのかを検討する上で重要な視点である。また、1以外のガラス質安山岩、無斑晶安山岩、緻密質安山岩は、成分組成が酷似しており、同一の噴出起源による石材である可能性も考慮する必要がある。

坂長村上遺跡で出土した資料の半数は破損したものである。2、3、5の折れ面を観察すると、夾雜物など衝撃に弱い部分から折れたもののほか、3のように刃部から力が加わって折れたものが存在している。これまで言われてきたとおり、有茎尖頭器等に投槍的機能（白石2001ほか）を考慮するならば、多くの資料で先端からの衝撃で折れたような痕跡、例えば石鐵等によく見られる「舌状部」を伴う先端の折れ面や彫器状の折れ面などを確認できるはずであるが、坂長村上遺跡出土例では認められず、類例の検討が必要である。

## 2. 鳥取県内出土の縄文時代草創期資料

ここでは、坂長村上遺跡出土資料の諸特徴を踏まえて県内出土資料について概観する。

### （1）県内出土資料の検討

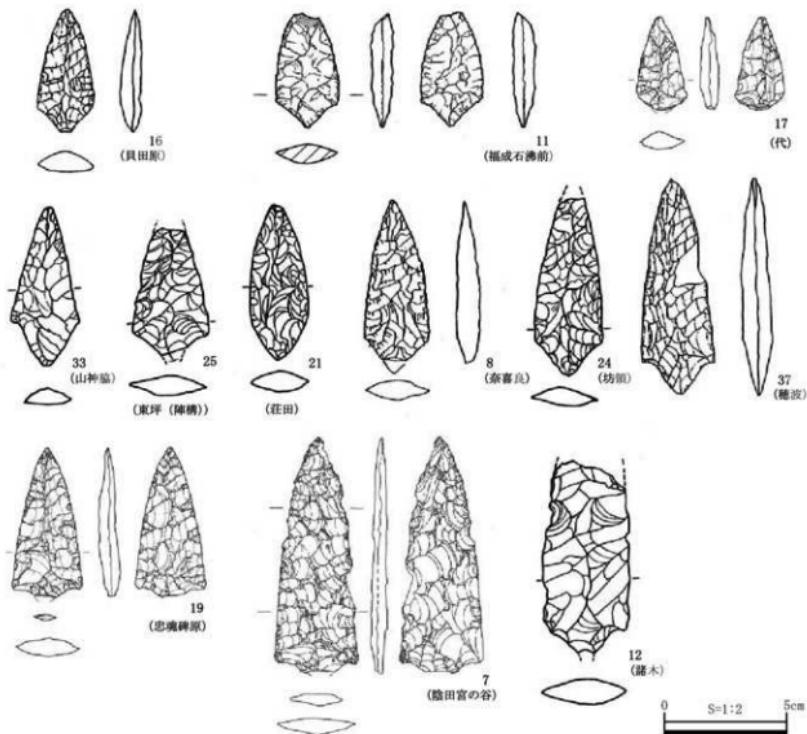
これまでに鳥取県下で確認された縄文時代草創期関連資料を第19表に示した。このうち、図化されている資料を第90、91図に掲載した。

**有茎尖頭器** 「断面形」「最大幅・最大厚の位置<sup>⑩</sup>」「直線状で鋭い刃部の有無」に着目し、これらを整えるための作業がおこなわれているかを観察した。これらの特徴を持つものは、坂長村上遺跡出土例（4、5）のほか、陰田宮の谷（7）、奈喜良（8）、貝田原（16）、代（17）<sup>⑪</sup>、忠魂碑原（19）、莊田（21）、坊領（24）の6点であった。資料の実見はできなかったが、実測図から福成石碑前（11）、諸木（12）、東坪（陣構）（25）、山神脇（33）もこれらのグループに含まれると考えられる。

第19表 鳥取県内における縄文時代草創期資料

資料 No.	遺跡名	所在地	縄文			石材	参考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)		
1	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	尖頭器	5.97	1.18	0.48	ガラス質安山岩
2	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	尖頭器	5.97	2.44	1.05	1.66 ガラス質安山岩
3	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	尖頭器	6.62*	2.77	0.52	4.3* 黒曜石
4	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	尖頭器	5.88*	2.20	0.74	8.5* ガラス質安山岩
5	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	有茎尖頭器	5.58*	2.20	0.74	ガラス質安山岩
6	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	有茎尖頭器	12.23	2.61	0.74	19.4 黒曜石
7	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	有茎尖頭器	2.27	2.27	-	細長い尖頭器 S.6
8	坂東村上遺跡	西伯郡若桜町坂長(田中山町)	有茎尖頭器	9.55*	3.36*	0.63	19.4* 黒曜石
9	米子市若桜	米子市若桜	尖頭器	6.48*	2.59	1.34*	微細な安山岩
10	吉谷原ノ上遺跡	米子市若桜	尖頭器	9.59	1.89	0.68	1.31 黒曜石
11	福島町瀬戸遺跡	西伯郡若桜町瀬戸(田中瀬戸町)	尖頭器	7.10	2.63	1.05	黒曜石
12	若木	西伯郡若桜町若木(田中若木町)	有茎尖頭器	4.7*	2.6	0.9	- ガラスカット棒
13	山川	西伯郡若桜町山川(田中山川町)	有茎尖頭器	8.0*	3.5	1.0	- ガラスカット棒
14	山川	西伯郡若桜町山川(田中山川町)	尖頭器	6.1	-	-	安山岩
15	浜名	西伯郡若桜町浜名(田中浜名町)	尖頭器	-	-	-	安山岩
16	貝原(久古)	西伯郡若桜町久古(田中久古町)	尖頭器	6.1*	2.5	1.0	-
17	代遺跡	西伯郡若桜町二代子(田中野瀬溝口町)	有茎尖頭器	5.93	2.27	0.83	8.1 黒曜石
18	三郎遺跡	西伯郡若桜町三郎(田中野瀬溝口町)	尖頭器?	8.91	2.71	0.78	5.1 黒曜石
19	忠興遺跡	西伯郡若桜町忠興(田中野瀬溝口町)	尖頭器?	6.12*	2.90	0.81	10.9* 黒曜石
20	新田山遺跡	西伯郡大畠町新田(田中新田町)	尖頭器	-	-	-	安山岩
21	大畠	西伯郡大畠町新田(田中新田町)	有茎尖頭器	6.13	2.42	0.87	12.6 黒曜石
22	大田	西伯郡大畠町新田(田中新田町)	尖頭器	5.78	2.35	1.1	1.45 黒曜石
23	長田	西伯郡大畠町新田(田中新田町)	尖頭器	2.0*	1.5*	0.7	- 黒曜石
24	坊宿	西伯郡大畠町坊宿(田名和町)	有茎尖頭器	7.14	2.77	0.82	15.4 黒曜石
25	平原	西伯郡大畠町平原(田名和町)	有茎尖頭器	-	-	-	ガラスカット棒
26	西野(野原)	西伯郡大畠町西野(田名和町)	尖頭器?	5.25*	2.53	1.91	12.9* 黒曜石
27	下ノ瀬戸遺跡(下瀬)	西伯郡大畠町下ノ瀬戸(田名和町)	尖頭器?	3.19*	1.52	0.62	2.3* 黒曜石
28	大山山西遺跡(雪丸)	西伯郡大畠町大山山西(田名和町)	尖頭器	13.01	2.81	0.98	35.3 黒曜石
29	大山山西遺跡	西伯郡大畠町大山山西(田名和町)	尖頭器	15.20	3.37	1.03	58.8 黒曜石
30	西野(野原)	西伯郡大畠町西野(田名和町)	尖頭器	7.63*	1.80	0.73	9.3* 黒曜石
31	林(森)河内	西伯郡大畠町林(田中山町)	有茎尖頭器	4.2*	2.2	0.7	- ガラスカット棒
32	松原河内	西伯郡大畠町松原(田中山町)	有茎尖頭器	6.6	2.8	0.7	- ガラスカット棒
33	山崎遺跡	西伯郡大畠町山崎(田中山町)	有茎尖頭器	6.6	2.8	0.7	- ガラスカット棒
34	袋原	西伯郡大畠町袋原(田中山町)	尖頭器	11.0	-	-	ガラスカット棒
35	吉谷原	西伯郡大畠町吉谷原(田中山町)	尖頭器	8.21	2.70	1.03	21.0 黒曜石
36	吉谷原	西伯郡大畠町吉谷原(田中山町)	尖頭器	7.5	2.6	1.2	- ガラスカット棒
37	吉谷原	西伯郡大畠町吉谷原(田中山町)	尖頭器	8.84	3.03	1.14	24.4 黒曜石
38	岡下(水原)	西伯郡大畠町岡下(田中白石町)	尖頭器	7.3	2.3	0.9	- ガラスカット棒
39	東白石(金町)	東白石(金町)白石(田中白石町)	圓筒加工石器	9.27	3.09	0.96	33.4 黒曜石
40	松谷(松ヶ丘)	東白石(金町)松谷(田中白石町)	圓筒加工石器	5.11	3.73	1.84	35.0 黒曜石
41	浜野原丘	鳥取縣若桜町浜野原(田中浜野原町)	尖頭器	7.08	3.08	1.33	26.3 黒曜石
42	浜野原丘(八束)	鳥取縣若桜町浜野原(田中浜野原町)	有茎尖頭器	-	-	-	黒曜石
43	浜野原丘(東束)	鳥取縣若桜町浜野原(田中浜野原町)	尖頭器	-	-	-	黒曜石
44	浜野原	鳥取縣若桜町浜野原(田中浜野原町)	尖頭器	5.21*	2.27	0.75	10.5* 黒曜石
45	浜野原	鳥取縣若桜町浜野原(田中浜野原町)	尖頭器	9.11	3.21	0.67	28.6* 黒曜石
46	米原(若谷)	米原(若谷)若谷(田中山町)	尖頭器	4.49	1.52	0.31	8.1 黒曜石
47	曾根田遺跡	曾根田遺跡(田中山町)	尖頭器?	5.38	3.5	1.3	- ガラスカット棒
48	遠見地(く)	西伯郡大畠町遠見地(田中山町)	尖頭器?	-	-	-	- ガラスカット棒

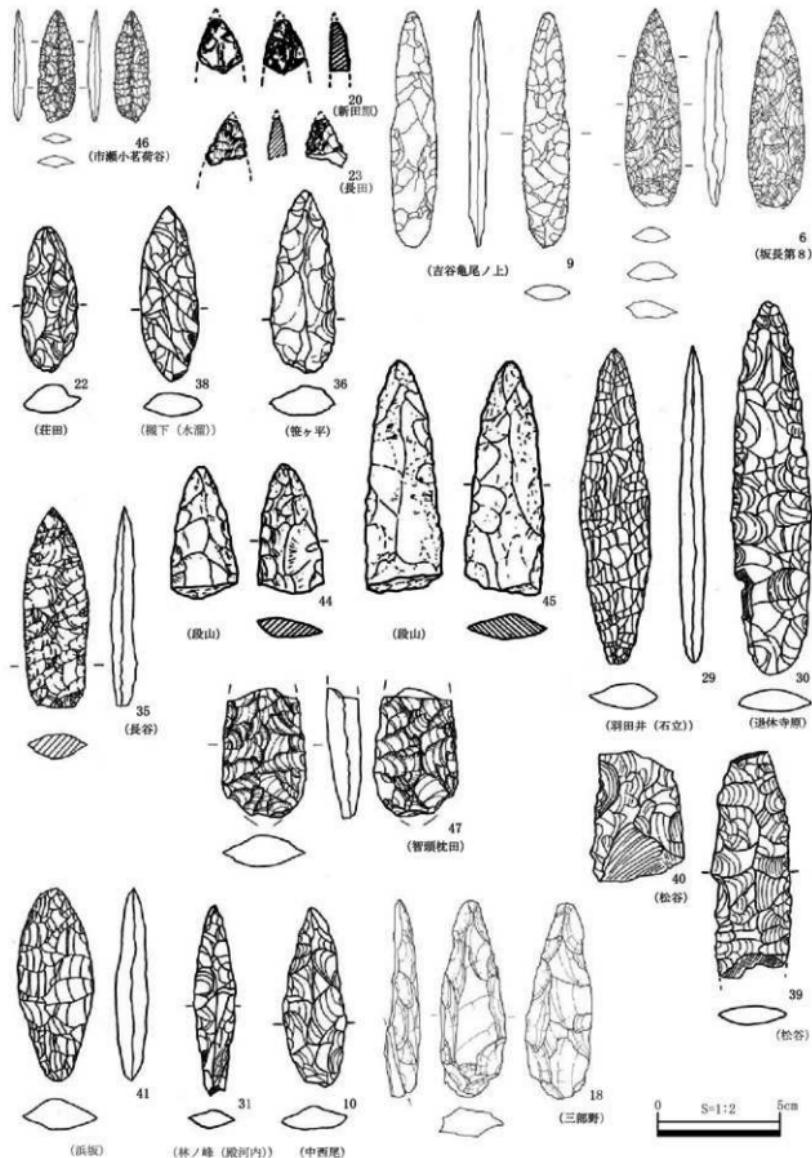
\*は保存性を表す。遺跡名の太字は未見か、または複数の資料について、複数の資料によって、材種名もそれによった。



第90図 有茎尖頭器実測図

大きさに注目すると、長さ<sup>(6)</sup>4～6cmの小型品（11、16、17）、長さ6～10cmの中型品（4、8、21、24、25、33、37）、長さ10cm以上の大型品（5、7、12）に区分することが出来る。形態は、茎部の形状、刃部の長さなどにバリエーションが認められるが、ほとんどの資料が最大幅2～3cm、最大厚0.7～1.0cmの間に収まり、また、基部端部から最大厚のある位置までの長さを計測すると、小型品で1.2～1.5cm、中・大型品で1.5～2.5cmとまとまりを見せる。このように、基部の法量には高い規格性が窺え、これらは着柄方法に制約されたものと考えられる。仮に最大厚付近までを柄に埋め込んだとすると、逆刺の有無等は思ったほど重要な要素ではないのかもしれない。

さて、資料の欠損部に注目すると、先端の破損品が比較的少ないことが分かる。また、先端部を欠損している坊領（24）においても、先に述べたような投射による痕跡は認められない。さらに、大・中・小型品の存在、重量にまとまりがないなど、これまで指摘されてきたような投槍的機能に對して疑問を抱かざるを得ない。しかし、先鋒さ、刃部の鋭さ、表裏面の平滑さは、刺突の機能をより高めるものとして理解できる。一方、茎部の破損品が一定の割合で存在する。特に、陰田宮の谷（7）は茎部が刃部方向から折れており、同じく刃部方向から破損した坂長村上（3）とともに使



用法の手がかりになると考えられる。また、坂長村上(5)や陰田宮の谷(7)など薄さに対して非常に長いものは、投射すると一度で破損する可能性が高い。製作に多大な労力と石材を要することを考えすれば、消耗品的な使用法は考えにくい。これからから、有茎尖頭器の機能は「投槍」ではなく「とどめを刺す手持ち槍」ではないかと推測するが、資料数の制約上ここでは可能性を指摘するに留めておく。

**尖頭器** 木葉形を呈するもの、柳葉形を呈するものなど、形態にバリエーションが認められ、加工技術も打撃のみによるもの、打撃と押圧剥離を併用するものなど様々である。

吉谷亀尾ノ上(9)、長谷(35)は刃部を鋭く形成し、技術的に有茎尖頭器と共通点が多い。浜坂(41)は先端側の刃部を鋭く形成するものの基部側はほとんど形成しない。基部側に高い稜が残り着柄が困難であるため、槍先ではなく尖頭状削器として用いられた可能性が高い。市瀬小茗荷谷(46)は刃部が鋸歯状で鋭く形成されるものの、横断面形のカーブが強くて異質である<sup>(9)</sup>。智頭枕田(47)は調整段階で中程の厚みを剥離で除去しようとする意図が認められず、むしろ剥離後に高まりを研磨するなど、特異な技術を用いる。茎部も明瞭ではなく、有茎尖頭器とは考えにくい。

莊田(22)、中西尾(10)は打撃によって調整され、複數箇所で大きなヒンジやステップが認められる。羽田井石立(29)、退休寺原(30)は、刃部が直線的ではなく鋭さに欠ける。段山(44、45)は、調整段階の剥離が粗く、表面の凹凸が著しい。石製ハンマーによる直接打撃によるものだろう。29、30、44、45のように長く大型で柳葉形を呈する一群は、同じ時期又は同じ文化に属するものである可能性がある。

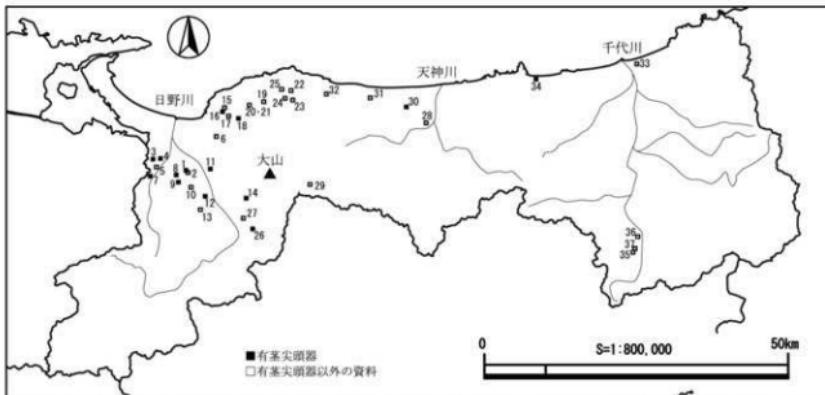
一方、これまで関連資料とされている中には、再検討をする資料も含まれている。松谷(39、40)は、両者とも打撃によって意図的に分割された痕跡が残っているほか、39は先端に穂面を残しており、尖頭器とは言い難い。敢えて言及するなら、細石刃の母型である可能性も考慮しておく必要があろう。また、三部野(18)は加工が他資料に比べて粗いほか、容易に取ることができるにもかかわらず着柄に障害となる突出部分を除去していないため、槍先とは考えにくい。このように、既に草創期関連資料とされているものについても、改めて精査する必要性を感じる。

## (2) 資料の分布状況（第92図）

これまでに亀井氏や根鈴氏らが指摘してきたとおり、有茎尖頭器の分布は大山周辺に集中することが分かる。また、有茎尖頭器以外の資料についても大山山麓に多く、東部地域は分布が希薄である。また、東部地域には市瀬小茗荷谷(46)、智頭枕田(47)のように技術的に異質なものも認められる。今後、資料の増加によって様相が異なる可能性もあるが、現状では地域性を表している可能性が高いと考えられる。特に、大山西麓では様々なバリエーションが認められ、有茎尖頭器の多様性が顕著である。坂長村上遺跡の事例から、これらは同時に存在し、併用されていた可能性がある。

## 3.まとめ

これまで、鳥取県内の縄文時代草創期資料について概観してきた。先行研究では、有茎尖頭器について基部をはじめとする平面形態に注目することが多かったが、本稿では「平滑で薄い凸レンズ状の横断面形」「茎部の付け根付近に最大幅・最大厚」「直線状で鋭い刃部」という特徴を抽出することができた。また、これらの特徴を満たすための調整段階と形成段階が存在し、これらが木葉形、



1 板長村上、2 板長第8、3 隠宮田の谷、4 奈喜良、5 吉谷龜尾ノ上、6 中西尾、7 福成石碑前、8 諸木、9 市山、10 萩名  
11 貞原、12 代、13 三郎野、14 忠魂碑原、15 新田原、16 莊田、17 長田、18坊領、19 東坪(陣構)、20 下大山第2(門前)、  
21 下大山第6、22 羽田井(石立)、23 退休寺原、24 林ノ峰(殿河内)、25 松河原、26 山神脇、27 袋原、28 長谷、29 笹ヶ平、30 稔波、  
31 楓下(水溜)、32 松谷(松ヶ丘)、33 浜坂、34 滝村、35 戹山、36 市瀬小若谷、37 賀頭枕田

第92図 繩文時代草創期間連資料分布図

柳葉形に見られない有茎尖頭器特有の手法として捉えることができた。一方、茎部については形態のバリエーションに比べて法量的な規格性が高く、基部形態は付随的な特徴である可能性が高い。

坂長村上遺跡では、緻密質安山岩、ガラス質安山岩において、成分組成的に比較的近い数値が得られ、未知の石材原産地の存在も想定された。これまで「サヌカイト」とされている資料の中には、肉眼で見る限り、坂長村上遺跡出土の緻密質安山岩と類似したものが多数含まれている。県内の資料を実見したところ、坂長村上遺跡で見られた3種ないし4種の石材が選択的に利用された可能性が高い。石器の動きを正確に捉るために、既知の資料を含めて理化学分析を進めていく必要性を強く感じる。

これまで投槍として捉えられがちな有茎尖頭器の機能についても、再検証をおこなう必要がある。実見した資料の中には、投槍だと積極的に評価できる痕跡は認められなかった。坂長村上遺跡では水場に近いと思われる緩斜面裾部で出土しており、狩猟法や対象物を解明する上での手がかりとなろう。また、旧石器時代終末期から縄文時代にかけて落とし穴が出現したり、有茎尖頭器と石鏃が共伴する事例が存在したりするなど、有茎尖頭器と様々な方法を組み合わせた狩猟法も想定される。今後、資料の欠損状況や出土状況などを詳細に検討し、より具体的な使用法を明らかにしていく必要がある。仮に、有茎尖頭器の機能を投槍ではなく手持ち槍とするならば、この時期に有茎尖頭器が全国的に展開した意味合いは非常に大きい。それは、前段階の細石刃文化期から後段階の石鏃の出現に至るまで、狩猟法や石材の調達法、人間の集団等に大きな変化が繰り返されたことを意味するためである。

今回は他地域の資料に目を向けることが出来なかつたが、今後このような視点を持って他の資料にあたっていく必要があろう。

本稿を成すにあたり、白石純先生には蛍光X線分析のデータ採取からデータ処理に至るまで、多

## 第1節 坂長村上遺跡出土の縄文時代草創期資料について

大なる御指導、御協力をいただきいた。また、資料見学の際に御配慮いただいたほか、このほかにも多くの方々に御指導、御助言をいただきいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。(五十音順、敬称略)  
池田武 伊藤創 内田律雄 岡本真也 角田寛幸 川上豊 北浩明 木田真 久保穂二朗 國田俊雄  
佐伯純也 酒井雅代 高橋章司 根鈴輝雄 野田久男 橋口剛士 東方仁史 柳本照男 山口剛

### 註釈

- (1) 有茎尖頭器について最初に触れた小林達雄氏は「有舌尖頭器」という用語を用いているが、茎部が着柄の機能と密接に関わるという立場から、本稿では基本的に「有茎尖頭器」という用語を用いる。
- (2) 本稿では、容量の削減、面の成形、厚みの除去等、全体的な形を作る作業を「調整」、先端部、茎部、直線的な刃部等、機能を持たせるために部分的な形を作る作業を「形成」として記述する。
- (3) 蛍光X線分析法による成分分析では、風化面を除去して分析する場合が多い。対象資料は著しく風化しており、適切なデータを得るために風化面を除去する必要を指摘されたが、できるだけ資料の現状を維持するため、非破壊でのデータ採取を試みた。
- (4) 硅素(Si)、チタン(Ti)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)、マンガン(Mn)、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、ナトリウム(Na)、カリウム(K)、リン(P)、バリウム(Ba)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、鉛(Pb)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、バナジウム(V)、イットリウム(Y)、亜鉛(Zn)、ジルコニウム(Zr)
- (5) S 7、S 8は、尖頭器類とともに出土した「微細剥離のある剥片」である。第5章第2節参照。
- (6) 最大厚の位置について、奈喜良(8)や貝田原(16)のように茎部の付け根付近に認められないものも含めている。8は裏面の先端側がヒンジによって厚さを取り切れなかったものであり、16は調整段階で失敗して裏面の茎部付け根付近が極端に薄くなったものである。ただし、両者とも片面は茎部付け根付近を最も高く仕上げており、他資料と同様の意図が窺える。
- (7) 幅に対してやや厚いこと、刃部を鋸くする形成が希薄であることから、弥生時代の有茎式石鏃である可能性も考慮しておく必要がある。
- (8) 復元長を含む。
- (9) 製作実験では、手の上で押圧剥離をかけるとこのように横断面形のカーブが強くなることが多い。

### <引用・参考文献>

梅原未治 1922 「鳥取県下に於ける有史以前の遺跡」『鳥取県史跡勝地調査報告』第一冊·····	(1)
亀井熙人 1971 「鳥取県の石槍一尖頭器の場合ー」『郷土と科学』第17巻第1号 鳥取県立科学博物館·····	(2)
亀井熙人 1972 「第一章第一節 縄文化の発展」『鳥取県史』第1巻原始古代 ·····	(3)
亀井熙人 1977 「大山山麓の尖頭器群」『日本考古学協会昭和52年度大会研究発表要旨』·····	(4)
白石浩之 2001 『石槍の研究』未完成考古学叢書4 ·····	(5)
根鈴輝雄 1991 「鳥取県の旧石器研究」『島根考古学会誌 第8集 島根考古学会·····	(6)
根鈴輝雄 1998 「山陰の尖頭器」『考古学ジャーナル』435·····	(7)
根鈴輝雄 2004 「尖頭器・有舌尖頭器の様相」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』 中・四国旧石器文化談話会·····	(8)
野田久男 1977 「気高町の原始・古代」『気高町誌』·····	(9)
野田久男 1984 「考古学から見た日南」『日南町史』·····	(10)

- 光石鳴巳 2005 『本州西半部における縄文時代草創期の様相』 ..... (11)  
 烏取県埋蔵文化財センター 1988 『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ3 ..... (12)  
 倉吉市教育委員会 1994 『長谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第76集 ..... (13)  
 西伯町教育委員会 1993 『福成石沸前遺跡』西伯町埋蔵文化財調査報告書第5集 ..... (14)  
 関金町教育委員会 1990 『関金町内遺跡群発掘調査報告書V』関金町文化財調査報告書第15集 ..... (15)  
 大山町教育委員会 1979 『新田原遺跡』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書IV ..... (16)  
 大山町教育委員会 1980 『長田遺跡』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書VII ..... (17)  
 智頭町教育委員会 2000 『智頭町内遺跡発掘調査報告書』智頭町埋蔵文化財調査報告書4 ..... (18)  
 智頭町教育委員会 2001 『市瀬小若荷谷遺跡』智頭町埋蔵文化財調査報告書5 ..... (19)  
 智頭町教育委員会 2006 『智頭枕田遺跡』智頭町埋蔵文化財調査報告書11 ..... (20)  
 溝口町教育委員会 1989 『溝口町内遺跡発掘調査報告書』溝口町埋蔵文化財調査報告書第6集 ..... (21)  
 溝口町教育委員会 1990 『三部野遺跡発掘調査報告書』溝口町埋蔵文化財調査報告書第7集 ..... (22)  
 溝口町教育委員会 1990 『溝口町内発掘調査報告書』溝口町埋蔵文化財調査報告書第8集 ..... (23)  
 米子市教育委員会 1976 『鳥取県米子市埋蔵文化財調査報告I』米子市発掘調査概報1 ..... (24)  
 (財)鳥取県教育文化財団 1986 『佐川遺跡群』鳥取県教育文化財団報告書20 ..... (25)  
 (財)米子市教育文化事業団 1997 『陰田第6遺跡 陰田宮の谷遺跡3区・4区』 ..... (26)  
 (財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査報告書23 ..... (26)  
 (財)米子市教育文化事業団 2003 『吉谷龜尾ノ上遺跡 橋本徳道西遺跡』 ..... (27)  
 会見町誌編纂企画委員会編 1973 『会見町誌』 ..... (28)

## &lt;図の出典&gt;

・ 7	-文献 (26)	・ 11	-文献 (14)	・ 44, 45	-文献 (18)
・ 8, 10, 12, 21, 22,		・ 16, 29, 37, 41	-文献 (7)	・ 46	-文献 (19)
24, 25, 30, 31, 33,		・ 20	-文献 (16)	・ 47	-文献 (20)
36, 38, 39, 40	-文献 (12)	・ 23	-文献 (17)	・ 17, 18, 19	-再実測
・ 9	-文献 (27)	・ 35	-文献 (13)		

## 第2節 奈良・平安時代における施設群の検討

### はじめに

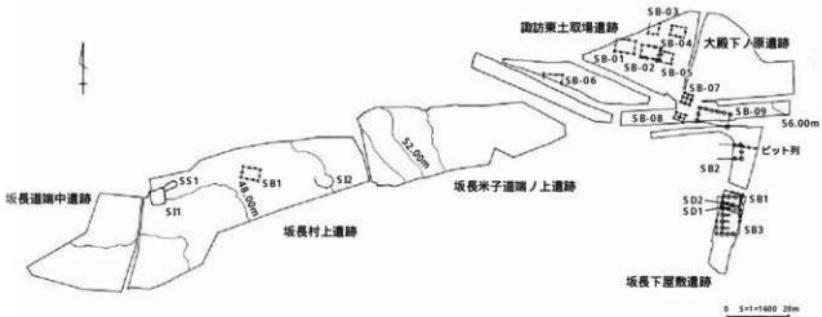
調査地周辺は從前より伯耆国会見郡衙の推定地として考えられてきた。昭和54～56年度に実施された長者屋敷遺跡では南北に整然と並ぶ大型の掘立柱建物跡が確認され<sup>[11]</sup>、周囲2km圏内には大寺庵寺や坂中庵寺の古代寺院が存在している。平成17年度の発掘調査では坂長下屋敷遺跡でし字に配置された大型の掘立柱建物跡が検出される<sup>[12]</sup>などさらにその蓋然性が高まりつつある。本調査地においても坂長下屋敷遺跡に近接する大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡では掘立柱建物群が、坂長村上遺跡、坂長道端中遺跡では遺構に加え、当該期の遺物が多量に確認されている。本節では、とくに坂長下屋敷遺跡周辺で確認された施設群の検討を行い、会見郡衙の具体的な様相を解明する一助としたい。

なお、大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡は坂長下屋敷遺跡の隣接地にあたり、調査の都合上、狭小な範囲毎に遺跡名が付けられているが、遺構の検出状況から見ても本来、同一の遺跡として取り扱うべきである。本節においては煩雑さを避けるため、大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡、坂長下屋敷遺跡を含めた範囲を指し示す場合には便宜的に「坂長下屋敷遺跡周辺」と呼称しておく。

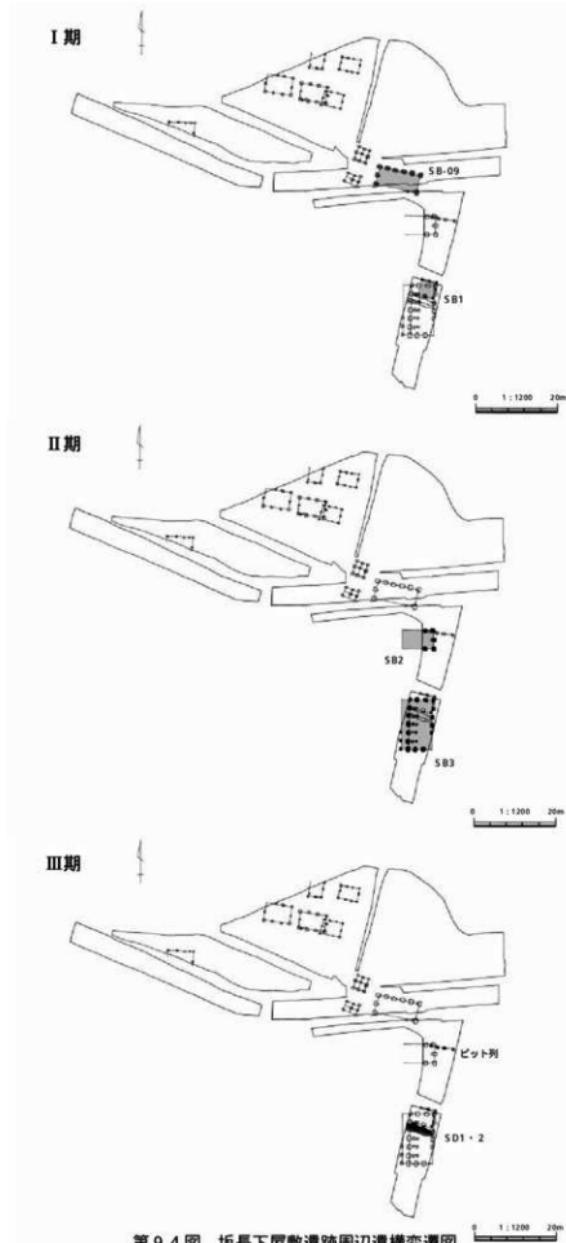
### 1. 遺構の時期と変遷

まず、遺構の重複関係や出土遺物、建物の方位などから遺構の変遷を整理しておきたい。坂長下屋敷遺跡周辺では掘立柱建物跡12棟、柵列、溝状遺構、土坑などが確認されている。そのうち、坂長下屋敷遺跡の遺構はその重複関係からS B 1→S B 2・3→S D 1→S D 2の変遷をたどることができる<sup>[13]</sup>。それに本調査地の大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡を加えて再整理すると、遺構はI～III期の3時期に大別される(第94図)。ただし、I期とIII期についてはさらに細分が可能である。

I期の遺構には坂長下屋敷遺跡S B 1があり、方位は真北から13度東偏する。大殿下ノ原遺跡S B-09も方位が同じで、当該期に造営された可能性が高い。両棟とも建て替えが1回行われており、新旧の2時期(I-a、I-b)に細分される。大殿下ノ原遺跡S B-09はI-b期に柱がすべて抜き取ら



第93図 飛鳥時代～平安時代遺構分布図



第94図 坂長下屋敷遺跡周辺遺構変遷図

れ、人為的に廃絶する。

II期の遺構には坂長下屋敷遺跡S B 2、3があり、建物の方位はほぼ真北を採用する。S B 2、3はS B 3の柱穴1基で重複がみられたが、両棟とも本格的な建て替えは行われず、短期間で廃絶したと考えられる。諏訪東土取場遺跡S B-06も方位がN $^{\circ}2\cdot E$ と真北に近く、当該期の建物となる可能性がある。

III期の遺構には坂長下屋敷遺跡S D 1、2、ピット列があり、方位はSD 1、2が真北から18度、ピット列が10度東偏する。SD 1、2が重複することから、当該期は少なくとも2時期(III-a、III-b)に細分される。ピット列に関してはSD 1、2とは方位が異なっており、全く形成時期が異なる可能性がある。

ここで問題となるのが、大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡のS B-01~05、S B-07、08の造営時期である<sup>(注4)</sup>。これらの建物群は方位が真北からA:7~8度東偏するもの(S B-01・02)、B:10~12度東偏するもの(S B-03~05)、C:21度東偏するもの(S B-07・08)の3つに分けられる。そのうち、AはS B-01・02の柱筋が通らない点や、棟間距離が1.5mと近接しすぎる点などから先後関係にあるとみられ<sup>(注5)</sup>、CもS B-07で同一位置での建て替えが行われている点からそれぞれ2時期ある。前述した遺構変遷との関係をみると、まず、BのS B-03~05は方位の点でI期、もしくはIII期に含まれる可能性がある。ただし、出土遺物もなく、I期における建物の方位とIII期の遺構であるピット列との方位の差は僅か3度しかないことから、さらに周辺の様相が明らかになるのを待って造営時期を慎重に判断する必要があろう。S B-01・02、S B-07・08も巨視的にみれば、真北から東偏する点でI期、またはIII期の遺構群と共通する。特にS B-07・08の方位はIII期のSD 1・2と比較的近いが、現時点では変遷上の位置づけは難しい。

各時期の年代については、まず、I-b期が大殿下ノ原遺跡S B-09の柱穴から出土した土器の年代から8世紀後半頃と考えられる。I-a期については時期を示す遺物は出土していない。ただし、坂長下屋敷遺跡周辺で確実に7世紀に遡る遺物がみられないことやI-b期とII期の建物の耐久年代などを勘案するとI-a期は8世紀前半頃と考えるのが妥当であろう。II、III期は坂長下屋敷遺跡S B 2・3、およびSD 1・2の出土遺物からII期が8世紀後半~9世紀初め、III-a期が9世紀代、III-b期が9世紀後半~10世紀前半頃と推定される<sup>(注6)</sup>。

## 2. 遺構の特徴と性格

次に、設定したI~III期の時期毎に遺構の特徴を整理し、その性格について触れてみたい。

### I期

I期は大型の掘立柱建物である大殿下ノ原遺跡S B-09が造営される。このS B-09は次のようないくつかの特徴が挙げられる。

- (1)桁行5間、梁行2間で、桁行が10mを越える側柱建物である。
- (2)柱掘方が長辺1mを越える隅丸方形を呈し、柱の太さは30~40cm前後と推定される。
- (3)柱間寸法は約2.1m等間と推定され、7尺前後と比較的広い。
- (4)同一位置での建て替えが1度行われている。

これらの建物の規模や特徴は山中敏史氏が官衙遺跡の特徴に挙げる遺構の条件をある程度満たしている<sup>(注7)</sup>。上記のような諸特徴は地方豪族居宅の建物にも認められるが、造営時期が8世紀以降に

下がると考えられ、周囲には会見都衙がすでに存在していたと想定されることなどから勘案すると、官衙施設としての機能を果たしていた可能性は十分に考えられよう。規模からは坂長下屋敷遺跡S B 1は桁行3間以上、梁行2間の小型の側柱建物で、柱の直系も15cmほどと小さい。S B-09を含めた大型建物群に付随する雑舎的な施設の可能性がある。

## II期

II期は大型の掘立柱建物である坂長下屋敷遺跡S B 2・3が造営される。2棟は柱筋を揃えてL字に配置されており、棟間距離は約12.3m(約41尺前後)を測る。I期のS B-09と比較すると柱の径が20~27cmと縮小する。前述したとおり、S B 2・3は官衙施設とみなすことができ、とくに、S B 3は廂付の構造をとることで格式が高められている。したがって、S B 3は当該期における官衙施設の中核建物となる可能性が高い<sup>(118)</sup>。官衙施設としての具体的な機能については、文字関連資料などの出土遺物もなく特定できない。ただし、すでに指摘されているとおり、短期間に廃絶され、恒久的な施設とは考えにくいこと、柱の直径が30cm未満と小さいことから郡庁となる可能性は低かろう<sup>(119)</sup>。諏訪東土取場遺跡S B-06は小型の側柱建物であるが、建物の全体像も明らかではなく、坂長下屋敷遺跡S B 2・3との関係は定かではない。

## III期

坂長下屋敷遺跡S B 2・3が廃絶した後、まず、溝SD 1が掘削される。その後、SD 1が埋没し、ほどなく同じ位置に溝SD 2が掘削し直されている。溝幅はSD 1が1.8mであるのに対してSD 2は1m前後と規模を縮小している。SD 1・2とも断面が逆台形を呈し、東西に直線的に延びており、SD 1の底面標高が東西で差がないことからも区画溝としての性格が考えられる。ただし、SD 1・2とも土壤分析の結果、溝内が流水の環境下にあったことが判明しており、排水の機能も兼ね備えていたとみられる。平面形態をみると、いざれも溝肩のラインが直線的ではなく、やや凸凹するという特徴を持つ。底面に凹凸は見られないが、いわゆる連続土坑状の溝として捉えることができる<sup>(1110)</sup>。このような溝は導水を必要としない官衙施設の区画溝でみられ、400mほど離れた長者屋敷遺跡でも官衙施設と考えられる建物群を区画するSD 4、16などで同様の特徴が認められる。現時点では当該期に確実に属する建物は確認されていないが、溝SD 1・2によって周囲から区画された官衙施設が存在する可能性がある。SD 1・2の北側に位置するピット列は柵列となる可能性が高いが、それによって区画される建物群は明らかではない。

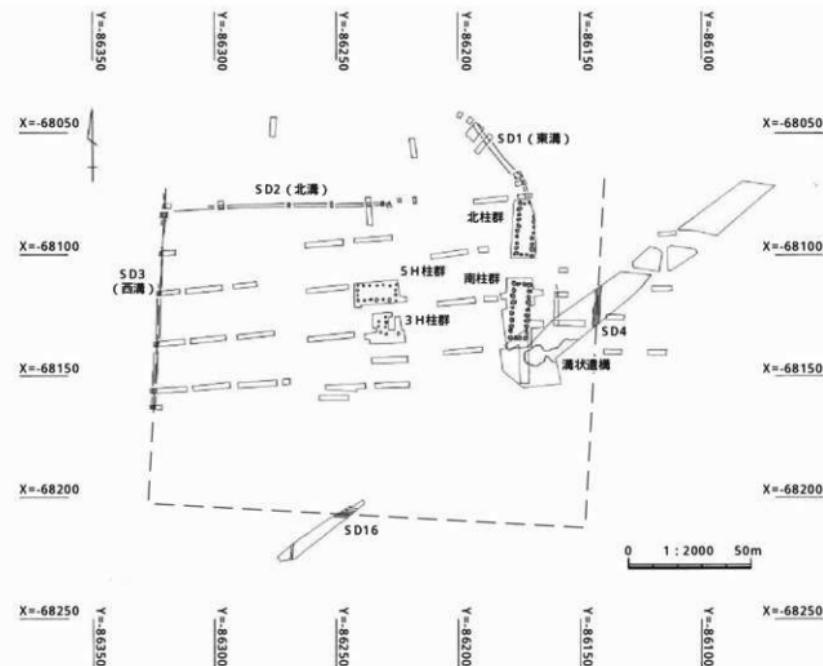
諏訪東土取場遺跡S B-01~05、大殿下ノ原S B-07・08についても特徴を整理しておく。まず、S B-03~05は桁行3間、梁行2間の小型の側柱建物で、柱穴の規模も小さく、柱筋の通りも悪いことなどから雑舎的な建物と考えられる。それに対して、S B-01・02は長辺60~80cm前後のやや大型で、方形の柱掘方を持ち、柱間寸法も2.1m(7尺)前後と広い。柱筋の通りも比較的よく、規格性のある建物と捉えることができよう。S B-07・08は桁行2間、梁行2間の総柱建物で、小型の倉と考えられる。平面積は10m<sup>2</sup>にも満たず、一般的な集落にみられる倉の規模と差はないが、S B-07は同一位置での建て替えが1度行われている。

以上のとおり、坂長下屋敷遺跡周辺の施設群のうち、I・II期における大型の掘立柱建物は官衙施設とみなしうる。また、坂長下屋敷遺跡S B 2・3廃絶後のIII期についても区画施設と考えられる溝の存在から近接した範囲に官衙施設が存続して営まれた可能性も十分にあろう。溝SD 1からは調査範囲の割に遺物が出土しており、赤色塗彩された土師器壺、皿などの食器類が目につくこと

もこのことを示唆すると思われる。造営方位をみるとⅠ期では斜方位をとり、Ⅱ期にいたり真北方へと変化するが、Ⅲ期に再びⅠ期に近い斜方位へと戻るという変遷をたどる。Ⅰ・Ⅲ期の造営方位が真北から10~20度前後東偏する理由については、施設群の存在する台地上の平坦部が谷地形によって南東から北西方向に制限されており(第96図)、その地形に影響を受けた可能性を指摘しておきたい。

### 3. 長者屋敷遺跡における施設群の性格

坂長下屋敷遺跡周辺から谷を隔てて南西へ400mほど離れた長者屋敷遺跡でも大型の掘立柱建物や区画溝などが確認されている(第95図)。長者屋敷遺跡については、既に北柱群と南柱群と称される大型の長倉が規模や特徴などから官衙施設と考えられること、建物群の敷地は溝によって囲繞され、方形城を呈し、東西が約180m、南北が少なくとも130m以上と推定されること<sup>(注11)</sup>を指摘した。また、通常、都府城が一辺50m前後の規模となることから都府とは別の官衙ブロックとなる可能性も示唆した<sup>(注12)</sup>。ここでは、さらに長者屋敷遺跡の官衙ブロックとしての具体的な機能を若干検討しておきたい。建物配置や敷地内における遺構の検出状況をみると特徴として以下のような点が挙げられる。



第95図 長者屋敷遺跡遺構配置図



第96図 遺跡周辺地形図

- (1) 北柱群・南柱群のような大型の長舎が直列の配置をとる<sup>(注13)</sup>。
  - (2) 少なくとも20000m<sup>2</sup> を越える広い敷地面積を有する。
  - (3) 敷地内には比較的空閑地が存在したとみられる。
- (1)の特徴を持つ官衙施設としては、まず、正倉を構成する側柱建物(=屋)を挙げることができる。屋の可能性がある建物としては北栄町殿屋敷遺跡の大型の側柱建物がある<sup>(注14)</sup>。この遺跡からはその他に総柱建物が検出され、炭化米が出土したことなどから伯耆国久米郡下神郷の郷倉と考えられている。大型の側柱建物は桁行7間、梁行3間の長舎で、同一位置での建て替えが2回行われ、規模や特徴は長者屋敷遺跡の北柱群や南柱群と類似する。(2)、(3)の敷地面積や空間構成についても正倉城の特徴に比較的近い。山中敏史氏によると、正倉城は集中型正倉の場合、敷地面積が10000～20000m<sup>2</sup> 程度の広い面積を占めていること、また、正倉群は数棟ずつの倉や屋からなる小群に分かれ、空閑地を挟みながら正倉城を形成していることを一般的な特徴として挙げている。さらに、空閑地が設けられた理由については火災による倉・屋の類焼防止を意図していたと論じている<sup>(注15)</sup>。長者屋敷遺跡の場合もトレンチの配置状況から建物群が密集する状況は考えにくい。また、北柱群と南柱群は東側の区画溝SD 4から約30m(約100尺前後)の距離<sup>(注16)</sup>をおいて造営されており、平成17年度調査区では建物群と区画溝の間に建物等は確認されていないことからも、ある程度空閑地が確保された可能性は考えられる。(1)～(3)の特徴に加え、昭和57年の報告書によると「僅かながら黒土層から焼米の層が見られた」という記載があり、炭化米が出土したことが知られている<sup>(注17)</sup>。出土層位や建物群との関連性など問題はあるが、炭化米の出土は正倉城を特定するうえでの一つの傍証となりうる。これらのことから類推すると、長者屋敷遺跡の北柱群・南柱群を含む官衙施設の性格としては正倉を有力な候補に挙げることができよう。ただし、正倉の主体を占める高床構造をもつ総柱建物は現状では全く確認されておらず、特定にはいたらない。

正倉以外に(1)～(3)のような特徴を持つ官衙施設としては、因幡国氣多郡衙とされる上原遺跡群I区における大型の掘立柱建物群の例がある<sup>(注18)</sup>。この建物群はコの字形か、口の字型の変形、あるいはL字型の変形というべき建物配置をとっているが、部分的には桁行5～7間、梁行3間の大型の長舎3棟が直列に配置されている。また、区画施設は確認されておらず、敷地面積は定かではないが、広い空閑地を有している。同一位置での建て替えが顯著である点も長者屋敷遺跡の北柱群・南柱群と共通する。これらの建物群は郡庁や正倉以外の官衙ブロックと考えられ、実務的な曹司である可能性が指摘されている。

#### 4. 坂長下屋敷遺跡周辺における施設群の性格

長者屋敷遺跡の北柱群・南柱群の存続期間は明確ではないが、区画溝からは8世紀後半から10世紀後半と考えられる土器が出土している<sup>(注19)</sup>。したがって、巨視的にみると、坂長下屋敷遺跡周辺の施設群は長者屋敷遺跡の施設群とある程度同時並存していた可能性が高く、地形条件なども勘案すると、長者屋敷遺跡と同じく郡衙を構成する一つの官衙ブロックと捉えるのが妥当であろう。しかし、施設群の空間的広がりは明確ではなく、長者屋敷遺跡のように溝によって囲繞され、周囲の施設群と明瞭に区別された院の構造をとっていたかどうかは定かではない。

長者屋敷遺跡は郡庁以外の官衙ブロックである可能性が高く、正倉、または曹司などが機能として想定される。坂長下屋敷遺跡周辺の施設群についても少なくともⅡ期の建物群は郡庁となる可能

性は低く、館、曹司などが候補として挙げられている<sup>(註21)</sup>。長者屋敷遺跡の北柱群・南柱群は同一位置での建て替えが顕著で、同じ機能が長期間維持されたと考えられるのに対して、坂長下屋敷遺跡周辺の施設群は8世紀後半から9世紀初めにかけて造営方位を大きく2度変えており、そのつど、建物配置が変化したことを窺わせる。したがって、坂長下屋敷遺跡周辺では官衙施設としての性格や機能が比較的短期間に変化した可能性が考えられる。

## 註釈

- (註1) 富長源十郎ほか 1982 『長者原遺跡群発掘調査報告書』 岸本町教育委員会
- (註2) 森本倫弘ほか 2006 『長者屋敷遺跡 坂長下屋敷遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団
- (註3) 前掲(註2)文献
- (註4) 諏訪東土取場遺跡 S-B-01に関しては柱穴から8世紀後半頃の土器が出土している。
- (註5) 高橋浩樹 2006 「第4章 まとめ」『諏訪東土取場遺跡 大殿下ノ原遺跡』財団法人米子市教育文化事業団
- (註6) 前掲(註2)文献
- (註7) 山中敏史 1993 『古代地方官衙遺跡の研究』 塗書房
- (註8) その場合、SB3の南側の範囲でSB2と対になる位置に建物は確認されていないことから、建物配置は少なくとも左右対称ではない。
- (註9) 前掲(註6)文献
- (註10) 山中敏史ほか 2004 『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』 独立行政法人 文化財研究所奈良文化財研究所
- (註11) 板本嘉和 2006 「第7章第3節 長者屋敷遺跡の検討」『長者屋敷遺跡 坂長下屋敷遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団
- この中で、敷地の南北方向の範囲について地形条件などから150mを越える可能性は低いことを想定した。
- (註12) 前掲(註11)文献
- (註13) 建物配置はL字となる可能性もあるが、同規模の長舎がコの字、またはロの字型となる可能性は低い。
- (註14) 北条町教育委員会 1988. 3 『殿屋敷遺跡－発掘調査報告書Ⅰ－』
- (註15) 前掲(註5)文献
- それのみならず、山中氏は穀穀の出納作業、穀穀の脱穀や剥搗、郷単位の庸米合成や俵詰め、あるいは穀穀の虫干しなどの共同の作業場としても利用された可能性を示唆している。
- (註16) 北柱群・南柱群の棟通りのラインから溝S-D-4の内側肩ラインまでの距離を測った数値である。
- (註17) 前掲(註1)文献
- (註18) 山中敏史編 2003. 3 『上原遺跡群発掘調査報告書－古代因幡国氣多郡衙推定地－』 気高町教育委員会独立行政法人 文化財研究所奈良文化財研究所
- (註19) 伯耆町教育委員会 2006. 3. 30 『長者屋敷遺跡 記者発表資料』
- 南側を区画する溝S-D-16から出土した遺物の実見に際しては伯耆町教育委員会 角田寛幸氏のお世話になりました。記して感謝いたします。
- (註20) 前掲(註7)文献
- 坂長下屋敷遺跡SB3の身舎内部に見られるピット群が棚状施設<sup>\*</sup>となる可能性も指摘されており、その場合、SB3が物資収納施設として機能していたことも考えうる。
- \*山中敏史氏のご教示による。

第20表 坂長下屋敷遺跡周辺遺構一覧表

## 掘立柱建物跡

遺跡名	遺構名	建物区分	規模		柱間寸法		柱掘方		柱痕跡	平面積	主軸方位	備考	
			桁行	梁行	桁行	梁行	形態	径/辺					
坂長下屋敷遺跡	側柱建物	3間 (6.0m) ?	2間 (4.2m)	2.0m	2.3m	円形	51~67cm	10~15cm	25.2m <sup>2</sup>	N-13° E			
	側柱建物	>2間 (4.0m)	2間 (4.5m)	2.0m	2.1~2.4m	方形	103~113cm	19~24cm	—	N-1° E			
	庇付建物	6間 (12.3m)	4間 (5.7m)	2.0~2.1m	1.9~2.0m	方形	82~122cm	20~27cm	70.1m <sup>2</sup>	N-1° E	雨付構造		
大殿下ノ原遺跡	庇付建物	2間 (3.2m)	2間 (2.9m)	1.8	1.7m	1.8	1.6m	円形	46~84cm	16cm	9.3m <sup>2</sup>	N-21° E	
	庇付建物	2間 (3.3m)	2間 (2.2m)	1.8	1.7m	1.8	1.6m	円形	46~62cm	20cm	7.2m <sup>2</sup>	N-21° E	
	側柱建物	5間 (10.5m)	2間 (4.5m)	2.1m	2.2m	方形	104~120cm	40cm	47.1m <sup>2</sup>	N-13° E			
深訪東土取場遺跡	側柱建物	3間 (7.0m)	2間 (4.9m)	2.1~2.3m	2.1~2.3m	方形	58~73cm	36~44cm	34.3m <sup>2</sup>	N-7° E			
	側柱建物	3間 (7.0m)	2間 (4.6m)	2.0~2.3m	1.9~2.2m	方形	69~83cm	21~38cm	32.2m <sup>2</sup>	N-8° E			
	側柱建物	>3間 (4.2m)	2間 (3.6m)	1.6	1.7m	1.8	2.0m	円形	38~63cm	14cm	—	N-10° E	
	側柱建物	3間 (5.3m)	2間 (3.6m)	1.4~1.9m	1.5	1.6m	円形	28~57cm	18~22cm	19.08m <sup>2</sup>	N-10° E		
	側柱建物	3間 (5.0m)	2間 (4.1m)	1.5~1.7m	1.5~1.8m	円形	27~40cm	10~28cm	20.5m <sup>2</sup>	N-12° E			
	側柱建物	>3間 (6.4m)	>1間 (3.6m)	2.0~2.2m	2.5m	円形	27~41cm	14~34cm	—	N-2° E			

※&gt;はそれ以上を表す。

## 溝状遺構

遺跡名	遺構名	規模		断面形		底面標高		方位	備考
		幅	深さ	東端	西端	方位	備考		
坂長下屋敷遺跡	S D1	1.5~1.9m	32cm	逆台形	55.5m	55.5m	N-18° - E		
	S D2	0.8~1.1m	57cm	逆台形	55.4m	55.1m	N-18° - E		

## ピット列

遺跡名	遺構名	規模	柱間寸法	柱掘方		柱痕跡	主軸方位	備考
				形態	径/辺			
坂長下屋敷遺跡	ピット列	3間(5.6m)	1.6, 2.4m	方形・円形	65~71cm	20cm前後	N-10° - E	

第21表 長者屋敷遺跡遺構一覧表

## 掘立柱建物跡

遺跡名	遺構名	建物区分	規模		柱間寸法		柱掘方	柱痕跡	平面積	主軸方位
			桁行	梁行	桁行	梁行				
長者屋敷遺跡	北柱群 側柱建物	9間 (約21m)	3間(約6.5m)	約2.1~2.5m	方形	>1m	—	約136.5m <sup>2</sup>	N-3~4° E	
	南柱群 側柱建物	9間 (約21.5m)	3間(約6.5m)	約2.1~2.5m	方形	>1m	約40cm	約139.75m <sup>2</sup>	N-3~4° E	

※&gt;はそれ以上を表す。

## 溝状遺構

遺跡名	遺構名	規模		断面形	底面標高		方位	備考
		幅	深さ		東端	西端		
長者屋敷遺跡	S D3	約1.0m	約0.3m	逆台形	—	N-4° - E		
	S D4	2.0~2.8m	1.3~1.5m	逆台形	49.73m	49.44m	N-4° - E	
	S D16	約2.1m	約0.6m	逆台形	—	N-10° - E		

## 第8章 総括

### 1. 各時代の様相

本調査地では旧石器・縄文時代から近世にいたる遺構・遺物が確認された。まず、各時代の調査成果を概観してみたい。

旧石器・縄文時代では坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡でナイフ型石器や尖頭器などの石器がロームの漸移層中から出土した。特に縄文時代草創期に位置付けられる尖頭器は5点を数え、石材の流通や尖頭器の機能、ひいては当時の狩猟方法をも解明するうえで貴重な資料となった(第7章第1節)。当該期の可能性がある遺構としては坂長米子道端ノ上遺跡で落とし穴が確認されている。

弥生時代の可能性がある遺構として大殿下ノ原遺跡、坂長米子道端ノ上遺跡で貯蔵穴と考えられる土坑が確認されている。坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では包含層中より少量ながら弥生時代前期の土器が出土している。

古墳時代では坂長米子道端ノ上遺跡で前期の竪穴住居跡が確認された。また、谷部にあたる坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では前期の土器が少量ながら出土しており、周囲の台地上に当該期の集落が存在した可能性を示唆する。

古代は本調査地において最も多くの遺構や遺物が確認された時期である。まず、坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡で飛鳥時代の竪穴建物跡、段状遺構が確認された。続く奈良・平安時代では大殿下ノ原遺跡で大型の掘立柱建物跡などが確認され、坂長下屋敷遺跡、諏訪東土取場遺跡で検出された建物群とともに会見郡衙に関連する施設である可能性が考えられる(第7章第2節)。また、坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では包含層中から土器、瓦、鉄製品、鍛冶関連遺物などの遺物が多量に出土した。円面鏡、転用硯の出土や赤色塗彩の土師器壺・皿の食器類が多くの割合を占めるなど官衙的特徴が認められ、周囲における会見郡衙の存在を裏付ける傍証の一つとなった。

中世の遺構は明確には確認されていない。遺物は坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡で僅かに青磁の碗や土師器などが出土している。近世では坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡で土坑や溝状遺構が、諏訪東土場遺跡で旧佐野川用水路跡(第2章第2節)が確認された。

### 2. 会見郡衙をめぐる諸問題

平成17年度の長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡の調査成果と合わせると徐々にではあるが、会見郡衙の具体的な様相を解明する材料が蓄積しつつある。そこで、今回の調査成果をもとに会見郡衙をめぐる現状や今後の課題を整理し、本書のまとめとしたい。

**官衙施設の空間構成** 400mほど離れた台地上に対峙する坂長下屋敷遺跡周辺と長者屋敷遺跡がそれぞれ会見郡衙を構成する一つの官衙施設群と考えられる。調査地周辺の地形を見ると、台地上の平坦部は幾筋も入り組む狭小な谷によって制限されている(第96図)。したがって、会見郡衙を構成する主要な官衙施設はこうした地形に制約されつつ、多核分散的に営まれたことも十分に想定しうる。ここで問題となるのが、谷部の坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡で確認された小型の掘立柱建物跡や竪穴建物跡の性格である。そのうち、竪穴建物跡S I 2は2本柱で、平面形が長楕円形を呈する。会見郡内の集落を管見する限り、同じ時期の竪穴建物は方形が基本であり、建物内からは鉄製

U字形鋸・鋤先<sup>(11)</sup>が出土していることからみてもやや特異な様相を示す。位置関係も勘案すると、これらの建物群は坂長下屋敷遺跡周辺や長者屋敷遺跡などの主要官衙施設と何らかの関連性を持つ複合的な施設とみなすこともできよう。したがって、会見郡衙全体としては各主要官衙施設の周辺に複合的な施設が取り巻くような景観をなしていた可能性もある。今後は郡衙の中核施設である郡庁城の確定などとともに、こうした狭義の官衙施設には含まれない施設群の検討も必要となろう。

**物資の生産と調達** まず、須恵器は本調査地、および長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡の資料を含めて胎土分析を実施した結果、島根県松江市大井窯跡群(山津窯跡)の胎土と類似していることが判明している(第6章第3節)。会見郡内の遺跡を見ると出雲国との国境にある陰田遺跡群、奥陰田遺跡群などでも胎土分析により大井窯産のものが搬入されたと考えられており<sup>(12)</sup>、会見郡衙でも調達、消費されていた可能性はある。ただし、金田瓦窯、両部太郎窯など会見郡内に存在する窯跡の様相が明らかではなく、生産地については今後、データの蓄積を待って慎重な判断が必要である。

次に鉄製品については坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では鍛治溝や輪羽口など多量の鍛冶関連遺物が確認された。また、100mほど離れた北側の台地上に位置する諫訪西土取場遺跡では掘立柱建物群とともに鍛冶関連遺物が数多く出土している<sup>(13)</sup>。いずれの遺跡も明確な鍛冶炉は確認されていないが、近傍に郡衙が管轄する鍛冶工房が存在していた可能性を考えられる。坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡から出土した鉄製品では釘類が多く、官衙施設の造営などに必要な道具をある程度賄っていた可能性を示唆する。

**周辺寺院との関連性** 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では多量の瓦類が出土している。ただ、両遺跡内に瓦葺建物は全く確認されておらず、出土した瓦の帰属が問題となる。一つの可能性としては会見郡衙内に瓦葺建物が存在したことが挙げられる。ただし、坂長下屋敷遺跡や長者屋敷遺跡の大規模建物は瓦葺きとは考えにくく、未調査区に瓦葺建物が存在した可能性が残るもの、現状では積極的に評価できない。もう一つの可能性として本調査地に近接し、8世紀後半頃の創建と考えられる坂中庵寺の瓦であることが挙げられる。確かに坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では坂中庵寺と同様の軒丸瓦が出土している。ただし、坂中庵寺の塔心礎からは500mほど離れており、寺域が本調査地周辺にまで及んでいる可能性は考えにくい。坂中庵寺のものとすれば、瓦の廃棄場所のようなものが調査地付近に存在していた可能性はあるかもしれない。

調査地周辺には坂中庵寺の他に大寺庵寺が2km圏内に存在する。大寺庵寺は7世紀後半に創建されるが、坂中庵寺と同様の軒丸瓦もみられ、両寺院が8世紀後半以降、同時併存していた可能性がある。郡衙周辺に存在する寺院の性格については諸説あるが、いずれにせよ、郡司など地方豪族が造営や維持管理に深く関わっていたことは確かであり、今後、会見郡衙と坂中庵寺、大寺庵寺の3者の関係を明らかにしていく必要があろう。

#### 注釈

(註1) 8世紀に入つても鉄鋤鋤の所有は一般化しておらず、その希少価値から職禄、貨幣的な役割を果たしたと考えられている。

伊藤祥子1974「律令制社会における鉄鋤の生産と流通について」『寧楽史苑』第20号 奈良女子大学史学会

(註2) 北浦弘人ほか 1996 『陰田遺跡群』 島根県教育文化財団

杉谷愛象ほか 1998 『壹原・奥陰田Ⅱ』 財团法人米子市教育文化事業団

(註3) 米子市教育文化事業団 2005.11.26 『諫訪西土取場遺跡 現地説明会資料』

図 版  
PLATE



長者原台地周辺空中写真(1)

図版 2



長者原台地周辺空中写真(2)



1. 調査地周辺の地形(1)(西から)



2. 調査地周辺の地形(2)(南から)

図版 4



1. 調査地周辺の地形（3）（東から）



2. 調査地周辺の地形（4）（上が北）



1. SB-07・08・09完掘状況(上が北)



2. SB-09完掘状況(東から)

図版6 大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡



1. SB-09 P1 (南東から)



2. SB-09 P2 (北西から)



3. SB-09 P4 遺物出土状況 (北から)



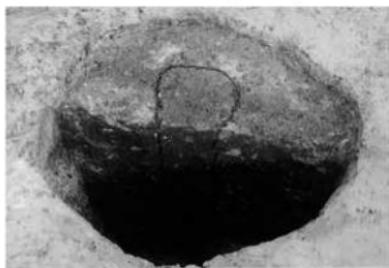
4. SB-09 P6 (南から)



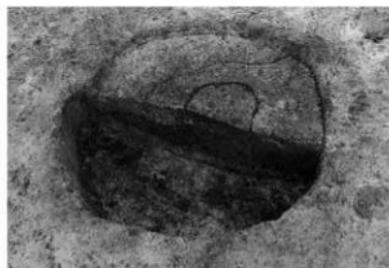
5. SB-09 P9 (西から)



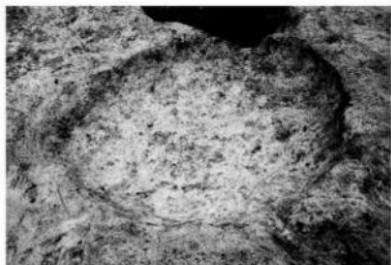
6. SB-09 P10 (北西から)



7. SB-07 P1 (南から)



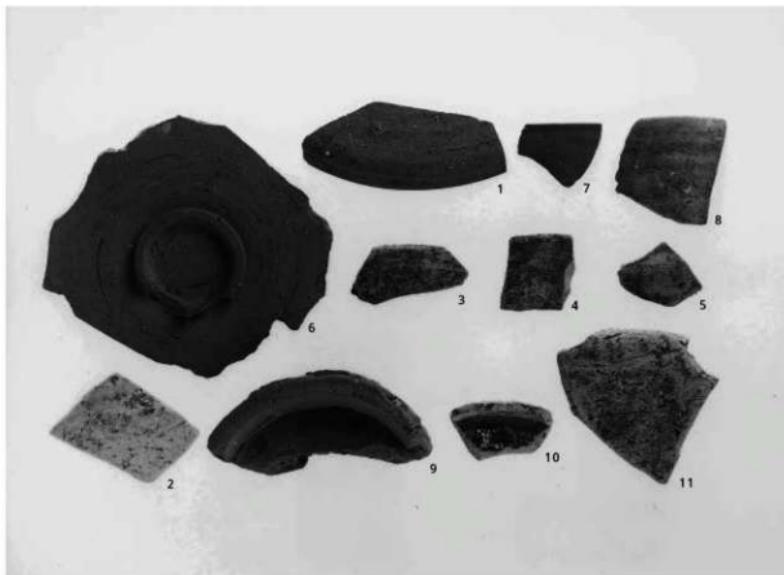
8. SB-08 P5 (南から)



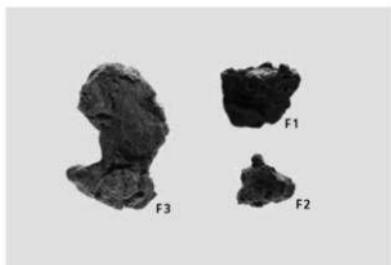
1. SK1 完掘状況（東から）



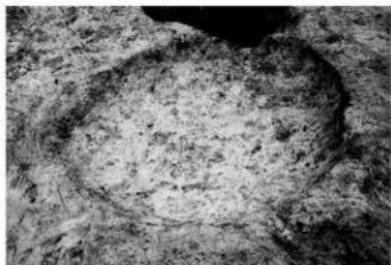
2. SK2 完掘状況（北東から）



3. 遺構外出土土器



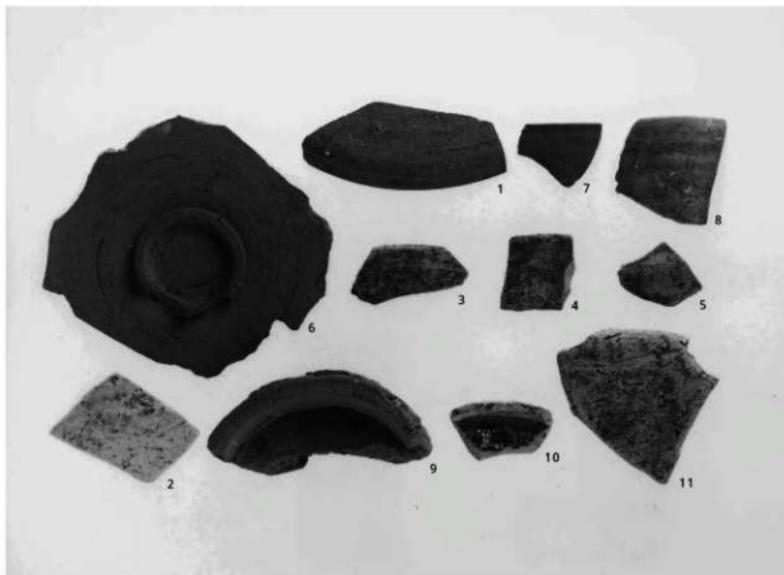
4. SB-09出土鉄関連遺物



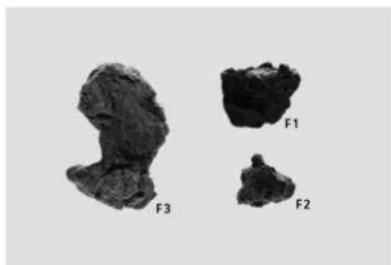
1. SK1 完掘状況（東から）



2. SK2 完掘状況（北東から）



3. 遺構外出土土器



4. SB-09出土鉄関連遺物

図版 8 坂長米子道端ノ上遺跡



1. 調査地全景(北東から)



2. 谷部土層堆積状況(北から)



3. SII 完掘状況(西から)

坂長米子道端ノ上遺跡 図版9



1. SI1 P8 (南から)



2. SI1 P2内甌出土状況 (南西から)



3. SB1完掘状況 (北から)

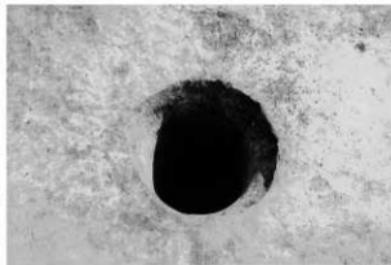


4. SA1完掘状況 (北東から)

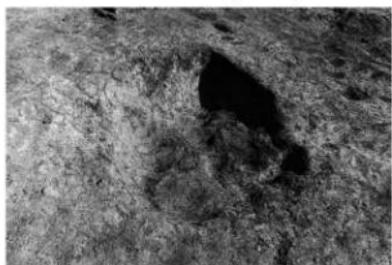
図版 10 坂長米子道端ノ上遺跡



1. SK1 完掘状況（西から）



2. SK2 完掘状況（北から）



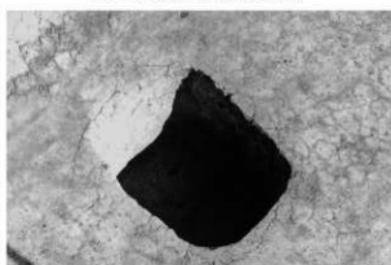
3. SK3 完掘状況（東から）



4. SK4 完掘状況（北から）



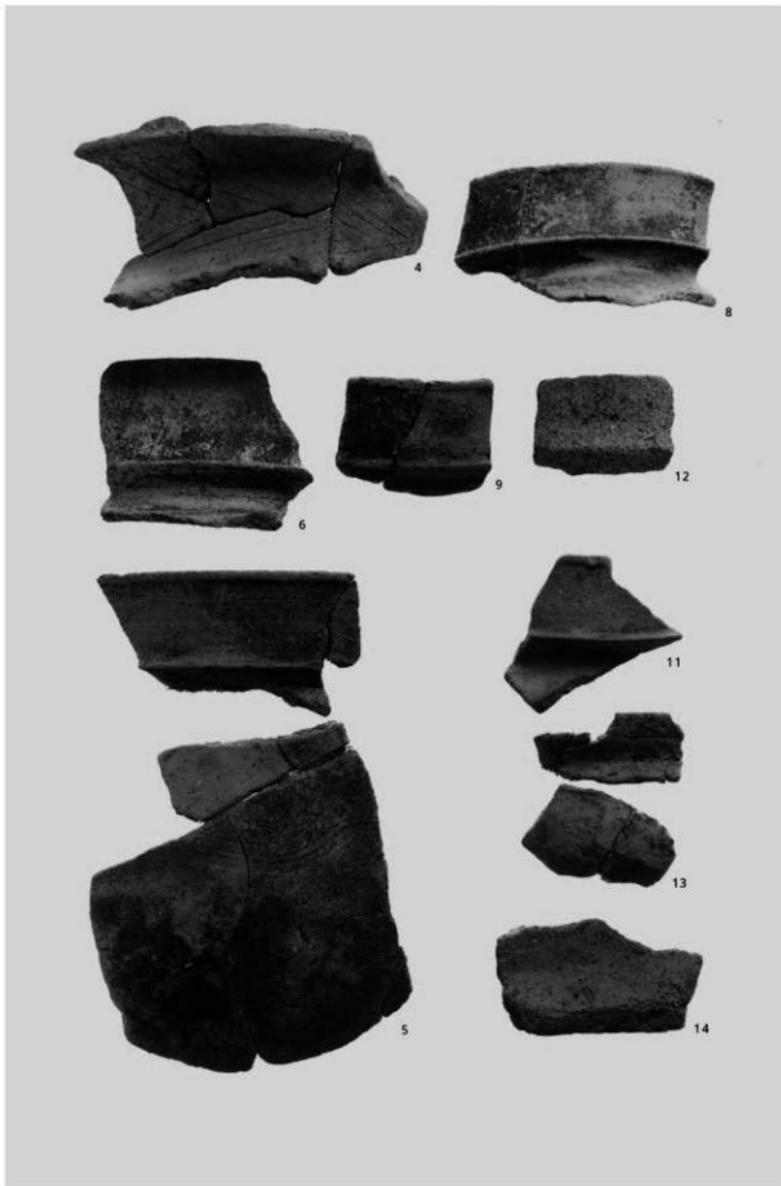
5. SK5 土層断面（南から）



6. SK5 完掘状況（西から）

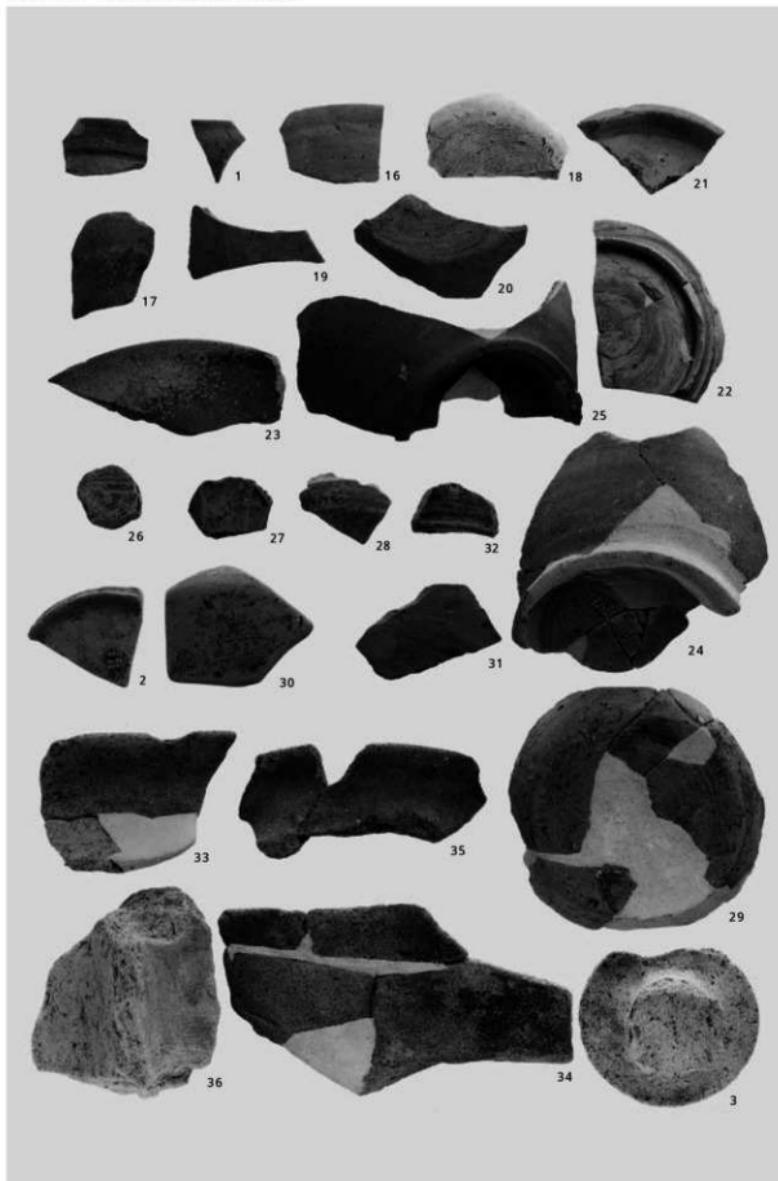


7. S11 出土土器（1）



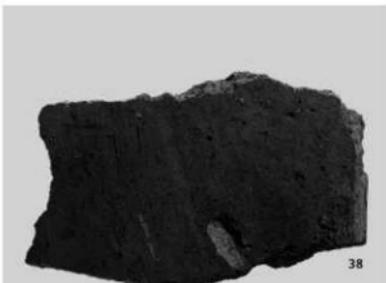
SI1 出土土器 (2)

図版 1 2 坂長米子道端ノ上遺跡



遺構外出土土器

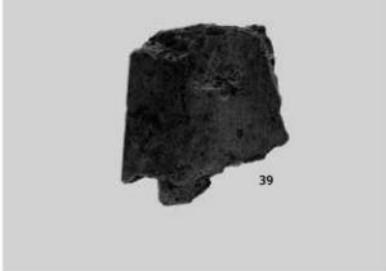
坂長米子道端ノ上遺跡 図版 1 3



F1



37



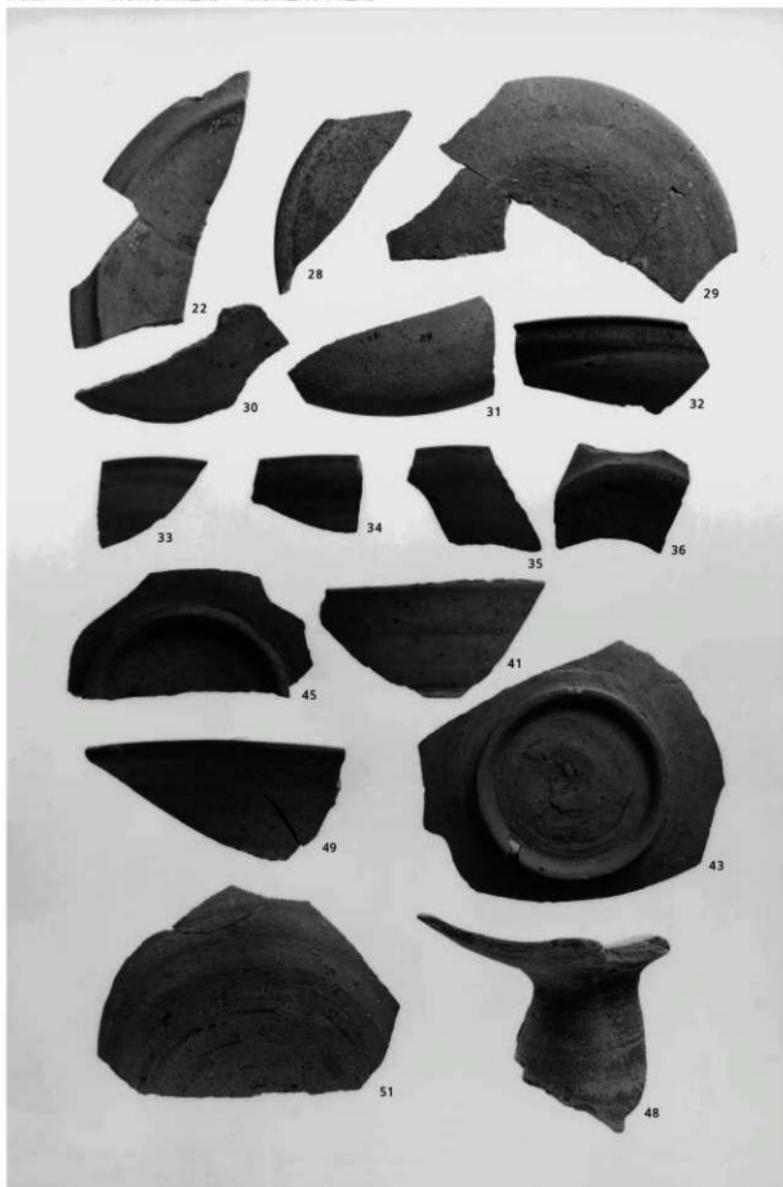
39

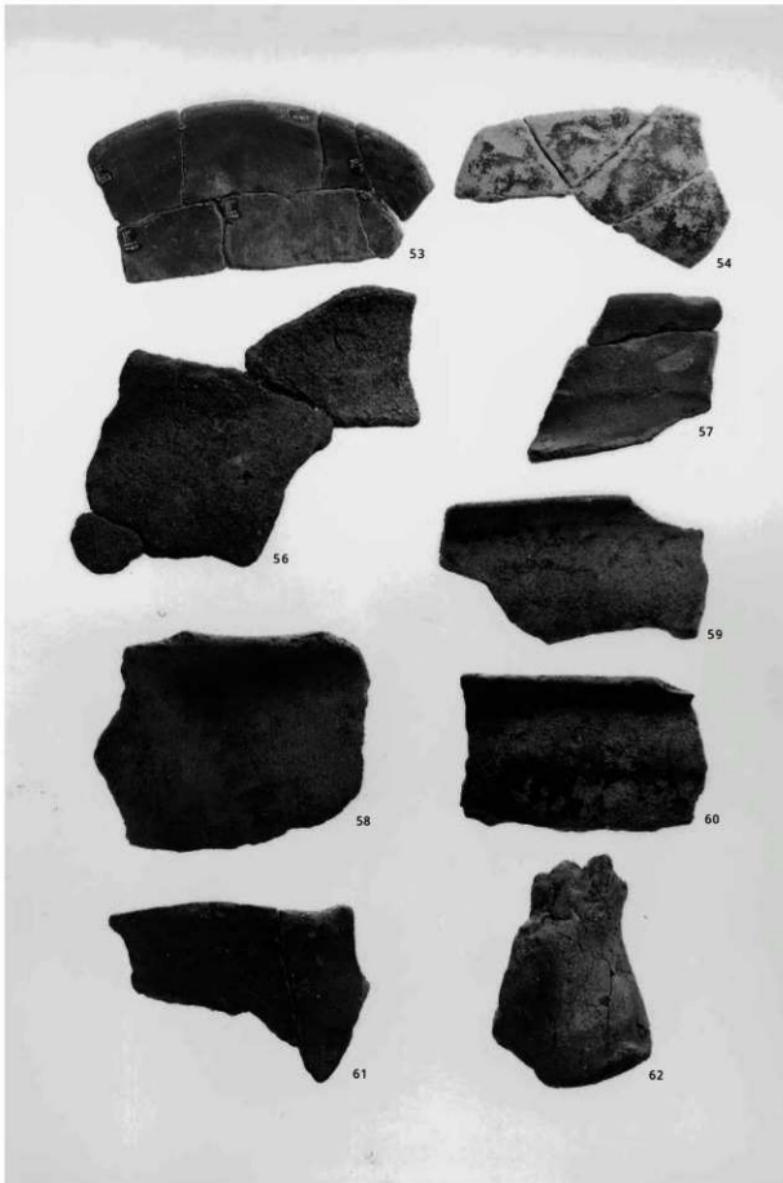


38

遺構外出土瓦・鉄製品

図版 28 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

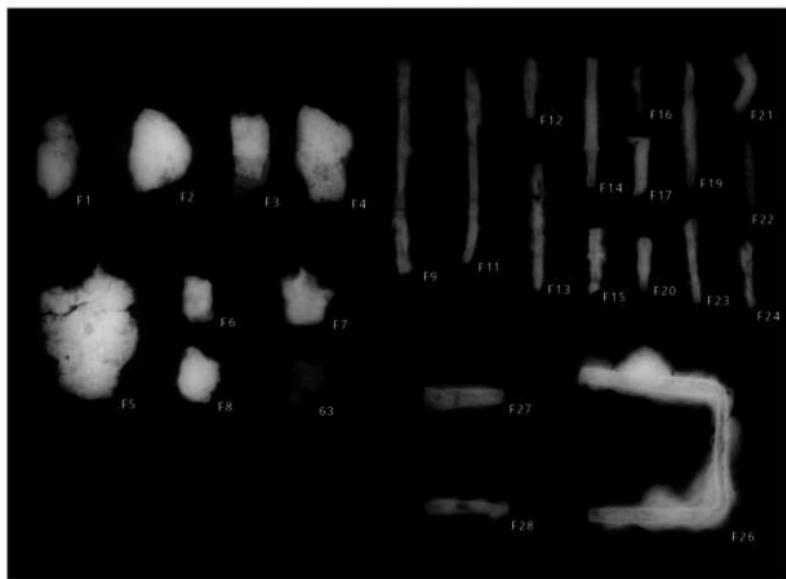




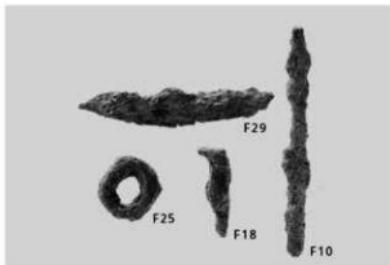
図版30 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡



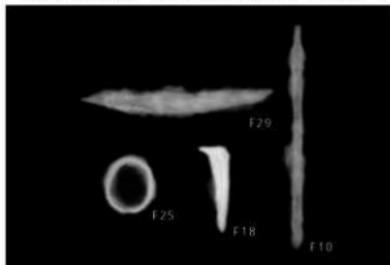
1. SI1出土鉄関連遺物(1)



2. SI1出土鉄関連遺物X線写真(1)



1. SII 出土鉄関連遺物 (2)

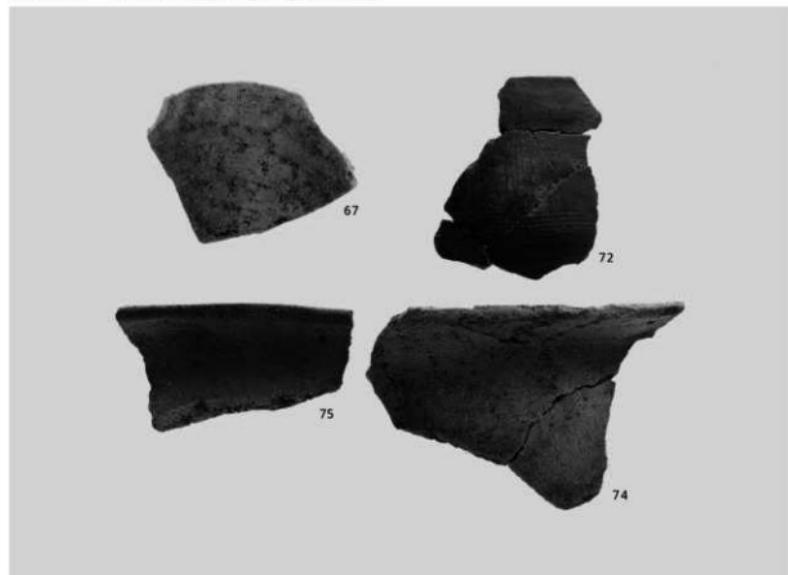


2. SII 出土鉄関連遺物X線写真 (2)



3. SII 出土土器 (1)

図版32 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

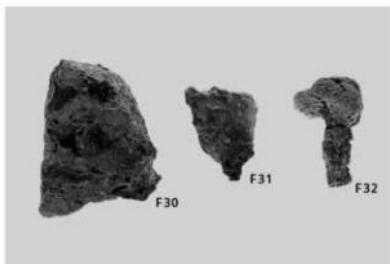


1. S12出土土器(2)

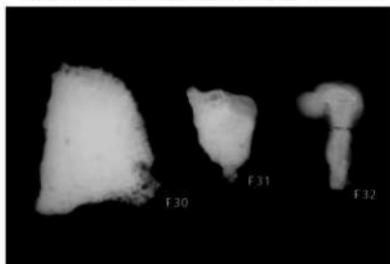


2. S12出土移動式竈

3. S12出土被熱石



1. S12 出土鉄関連遺物



2. S12 出土鉄関連遺物X線写真



3. S12 出土鉄斧



4. S12 出土鉄斧X線写真

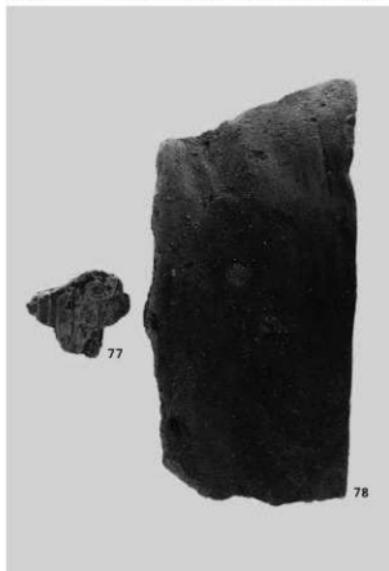


5. S12 出土鋤・鋤先



6. S12 出土鋤・鋤先X線写真

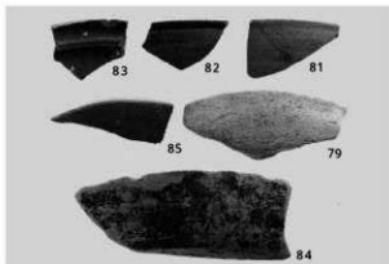
図版3.4 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡



1. SS1出土土製品



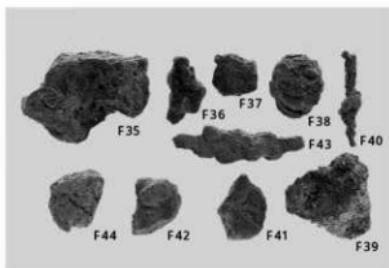
2. SS1出土土器



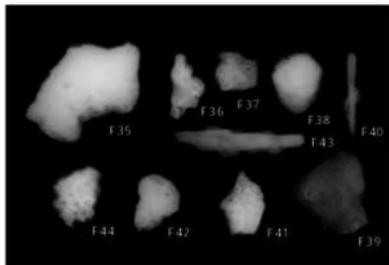
3. SB1、SK1・3・5出土土器



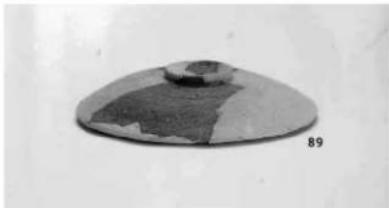
4. SK8出土土器



5. SB1、SK1、P1・13出土鐵関連遺物

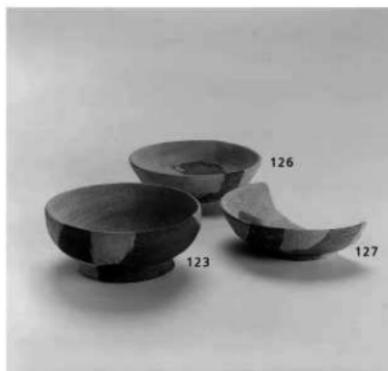
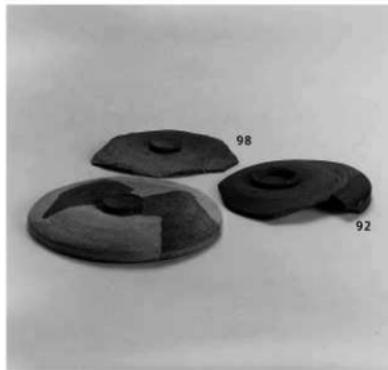


6. SB1、SK1、P1・13出土鐵関連遺物X線写真

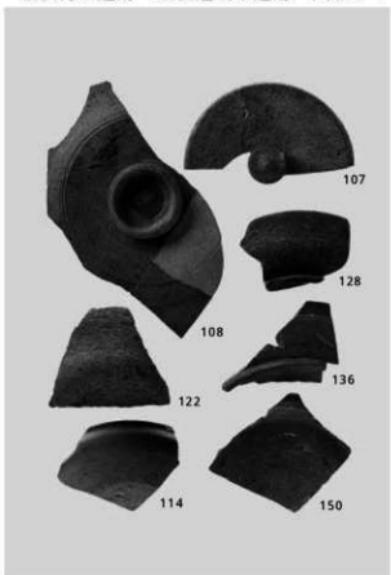


II層出土土器・土製品(1)

図版36 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

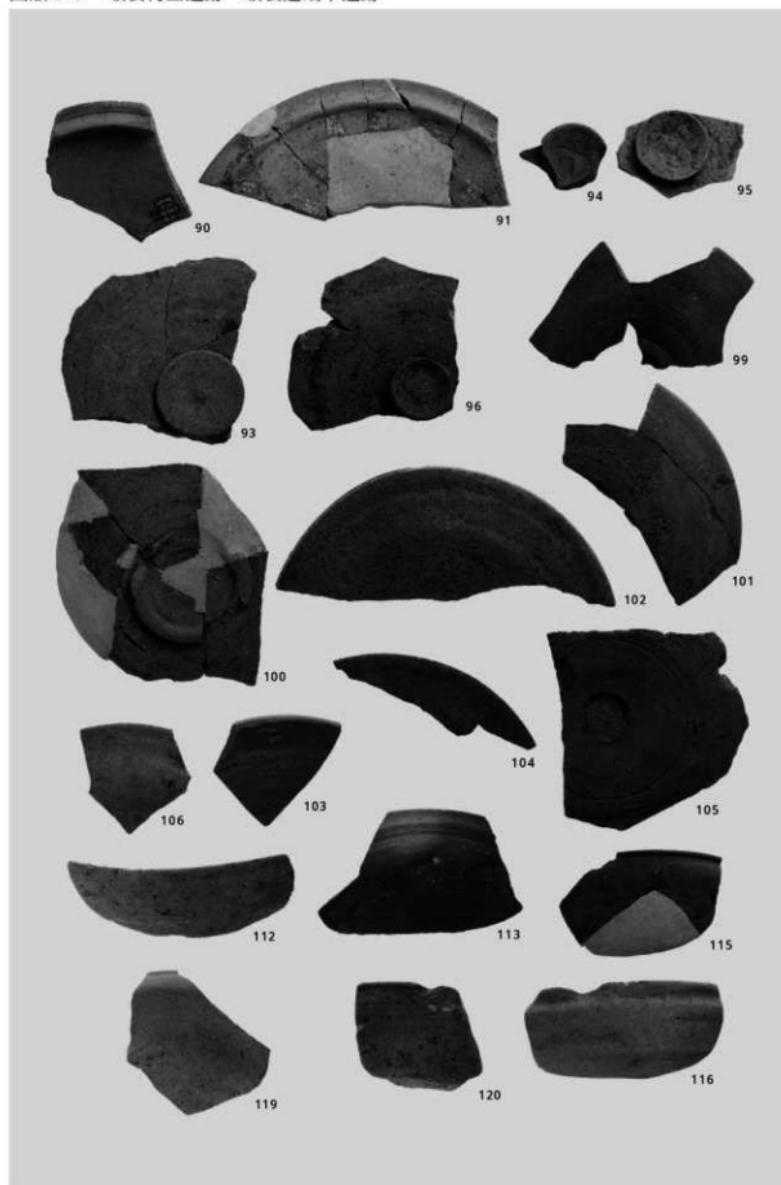


II層出土土器・土製品(2)

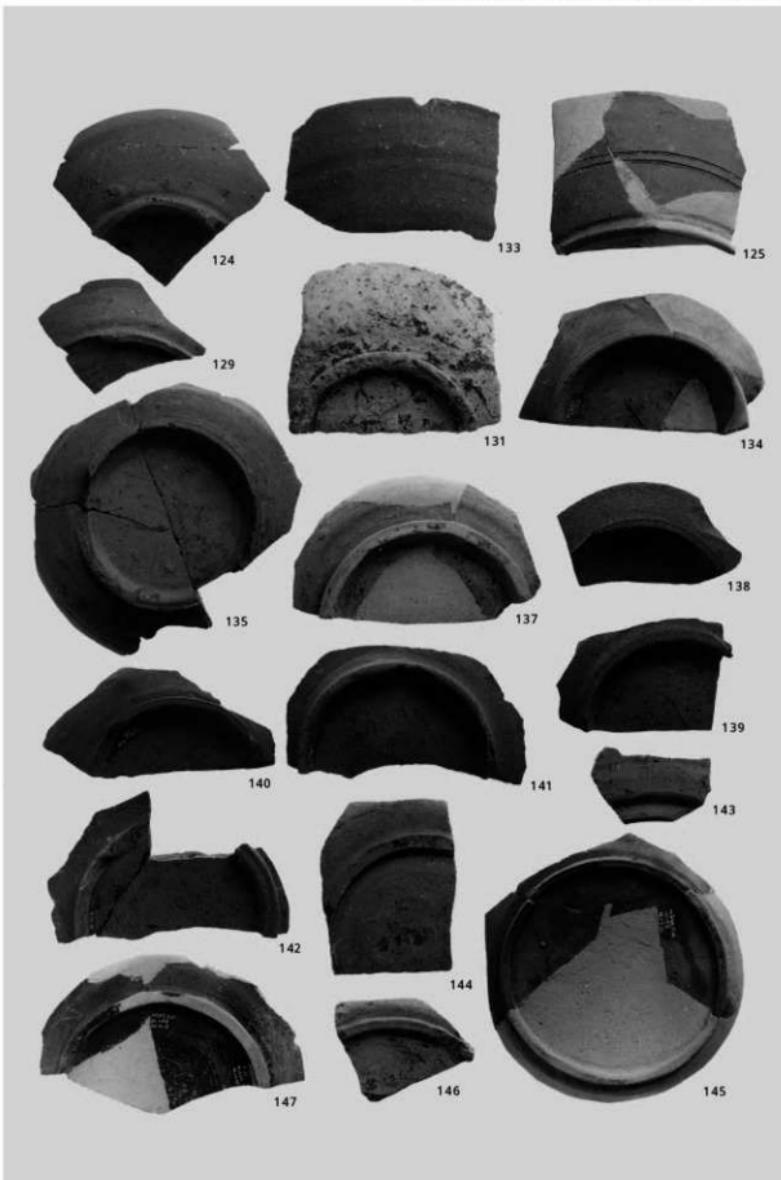


II層出土土器・土製品(3)

図版 3 8 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

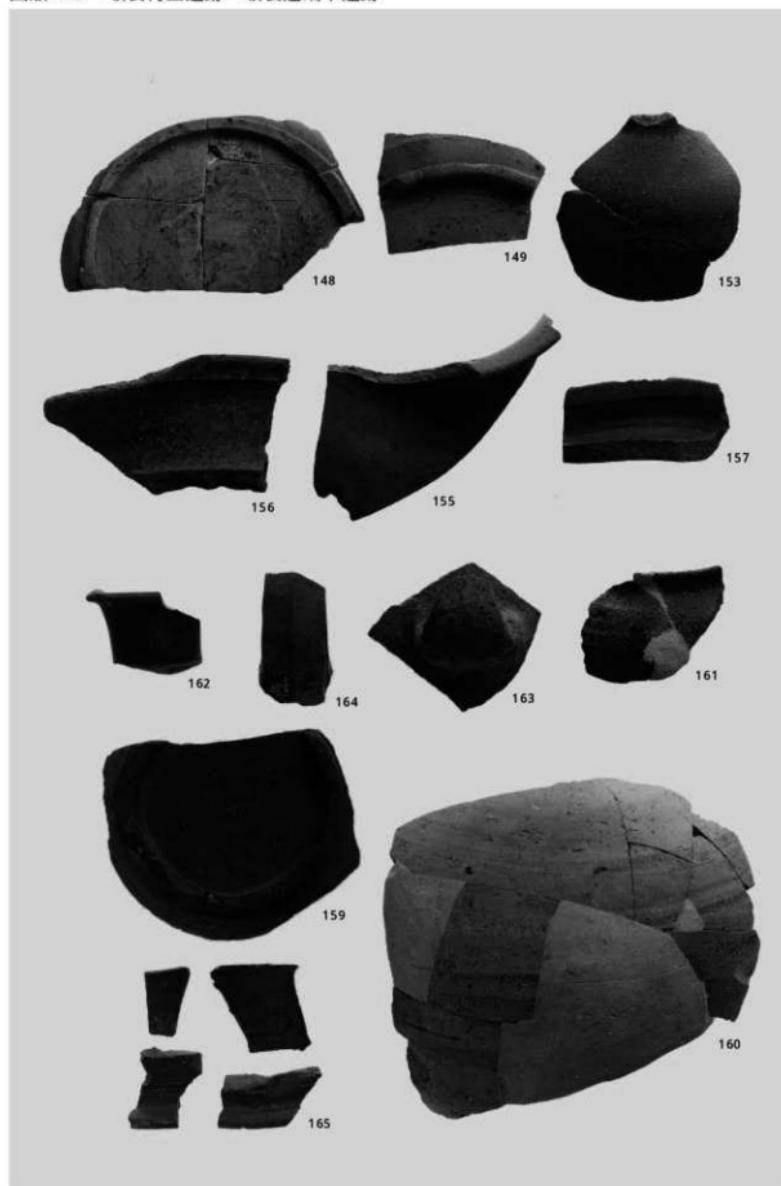


II層出土土器・土製品(4)

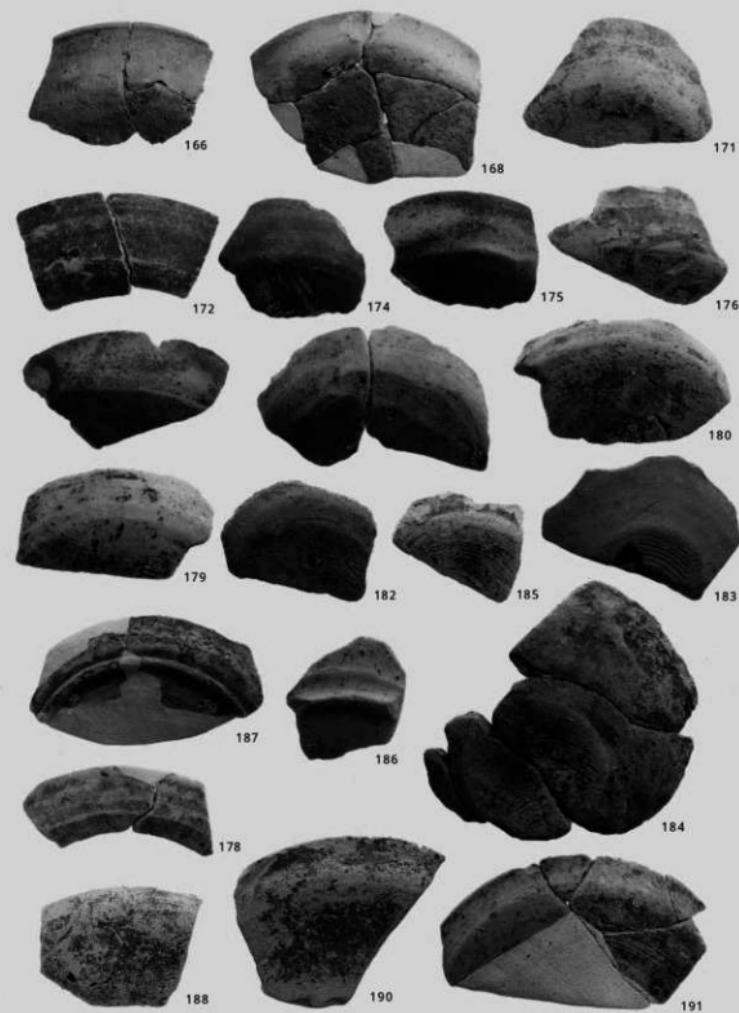


II層出土土器・土製品(5)

図版 4 0 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

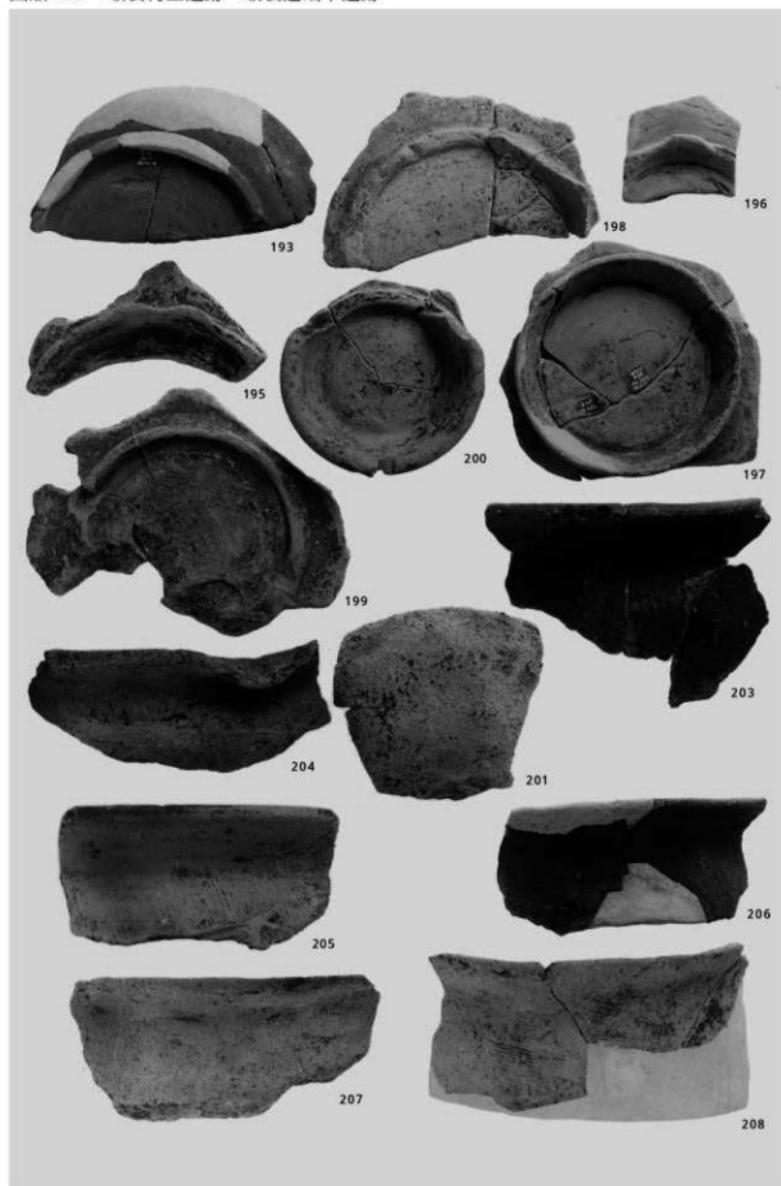


II層出土土器・土製品(6)

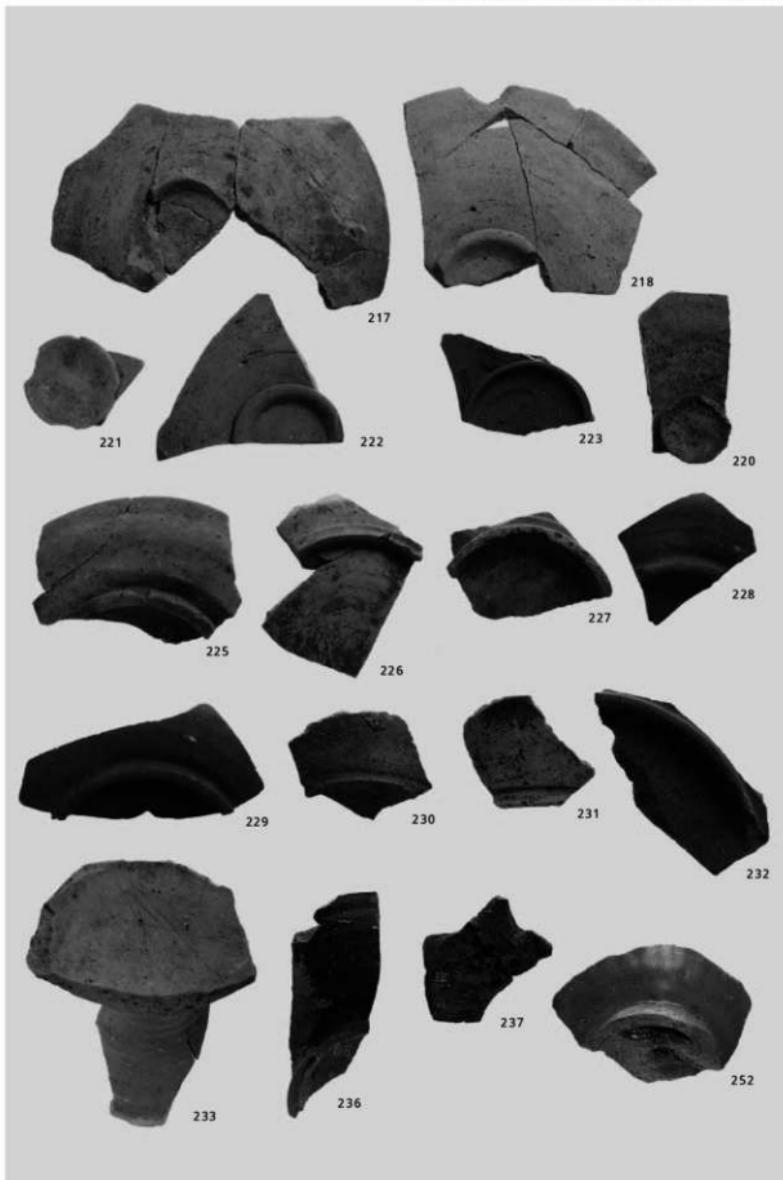


II層出土土器・土製品(7)

図版 4 2 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

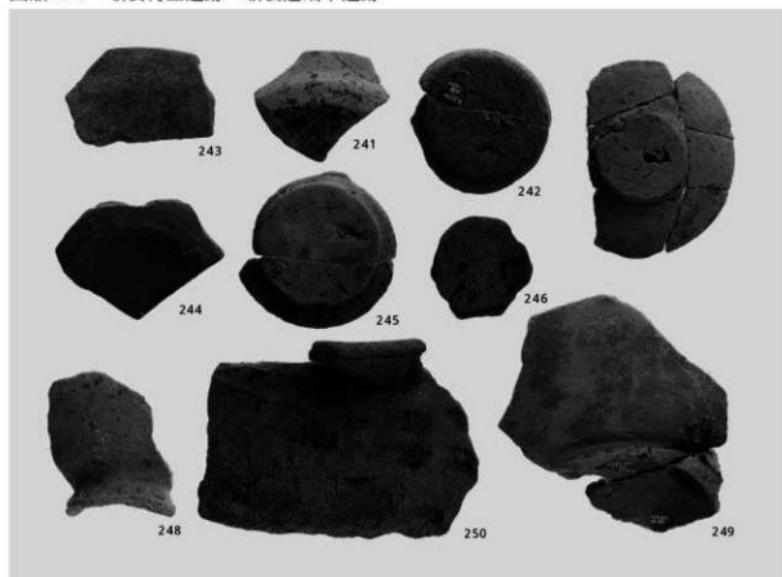


II層出土土器・土製品(8)



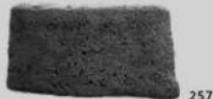
古代・中世土器(1)

図版 4 4 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡



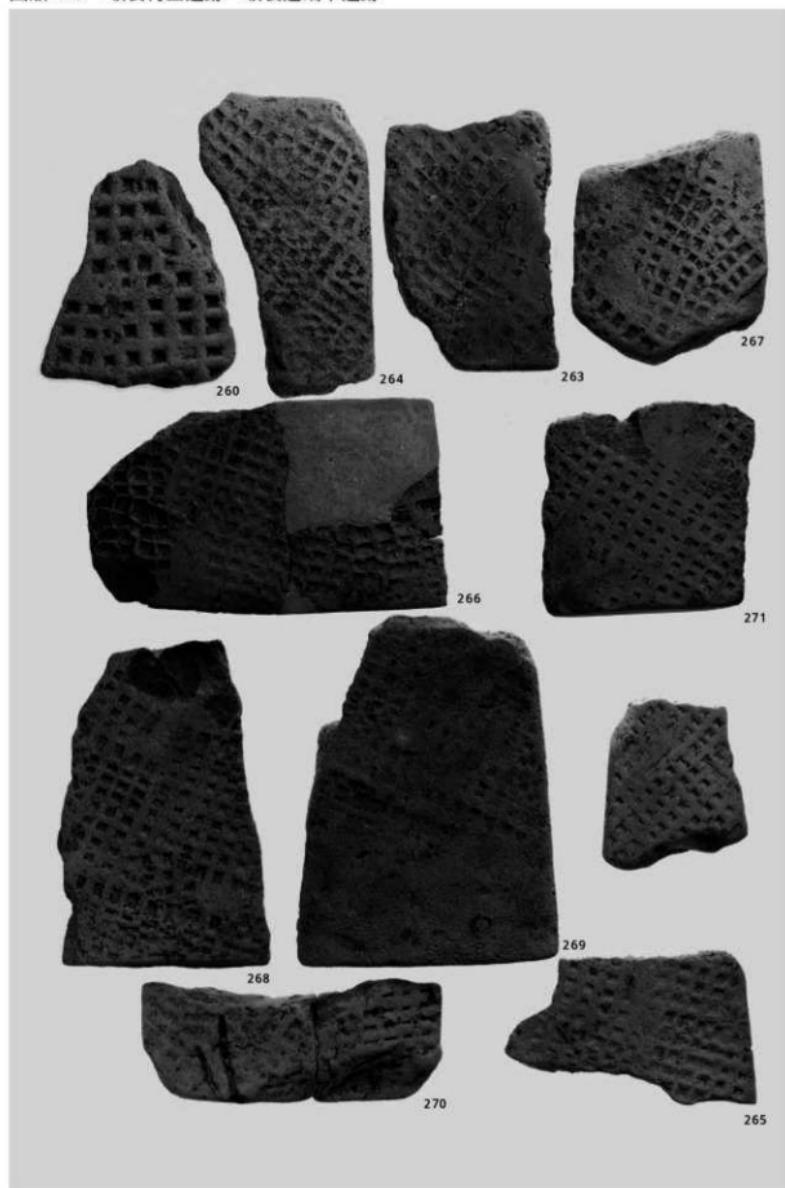
古代・中世土器 (2)



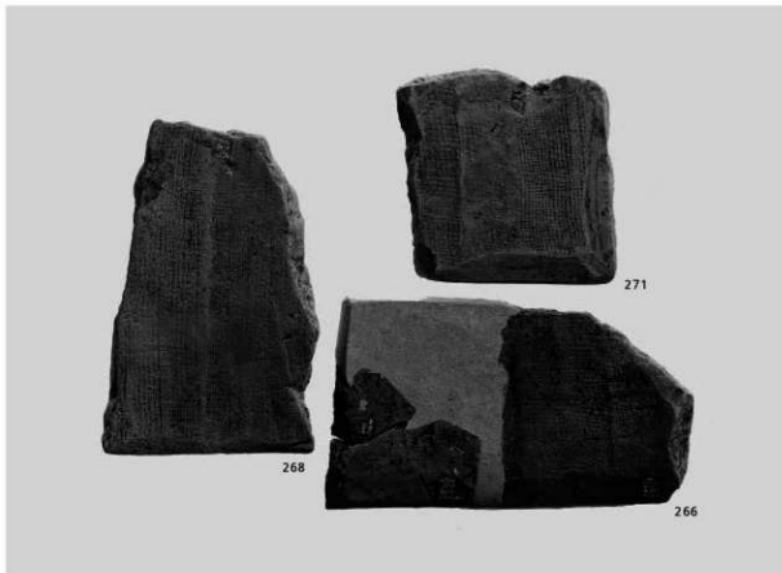
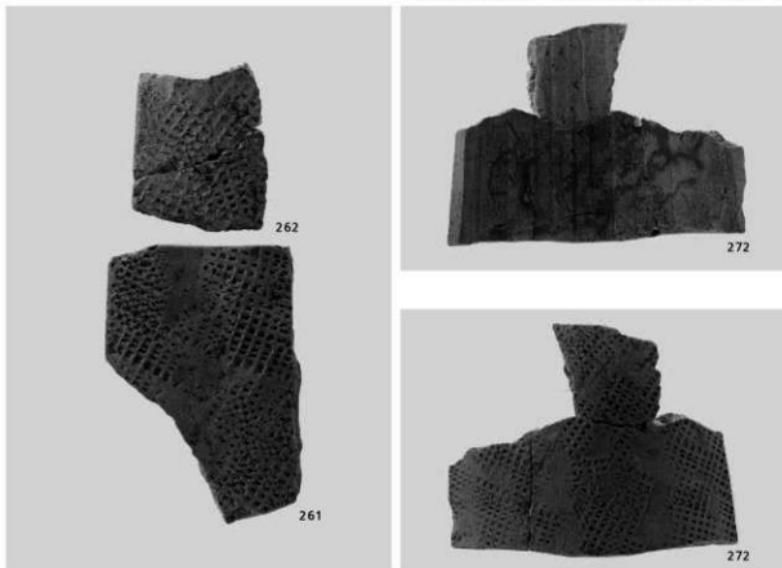


瓦類(1)

図版 4 6 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

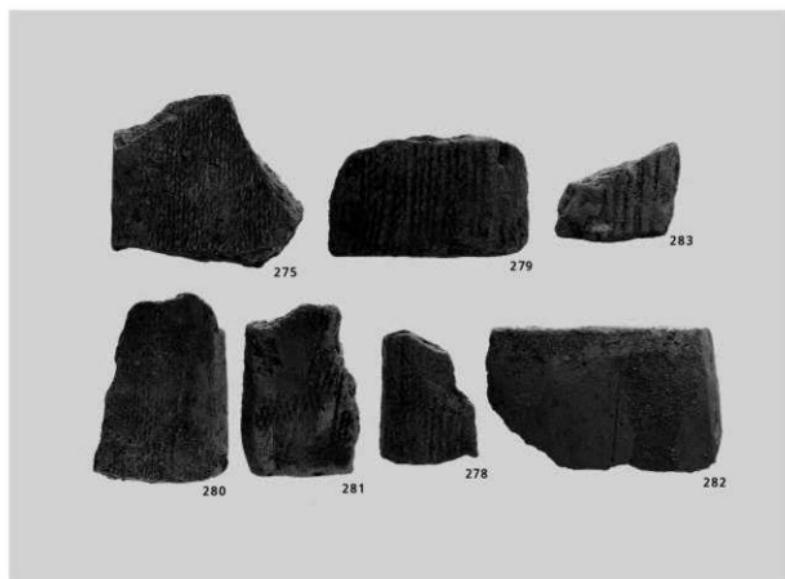
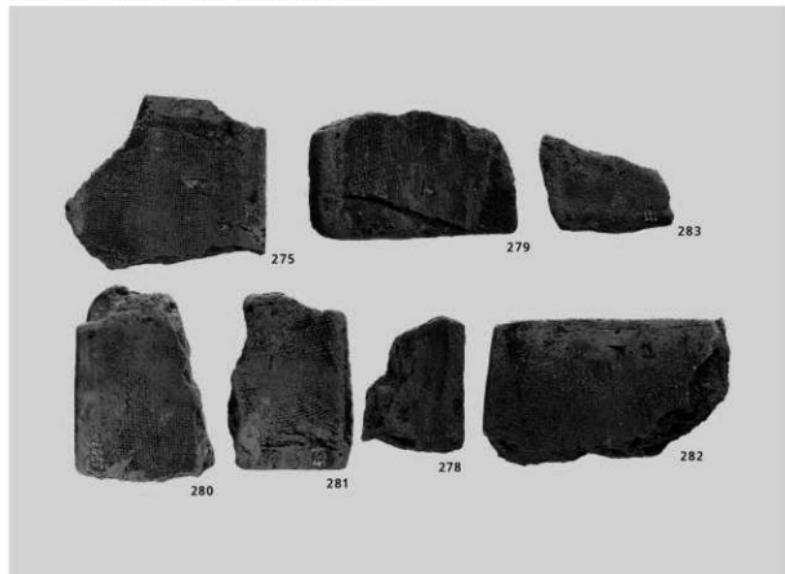


瓦類(2)

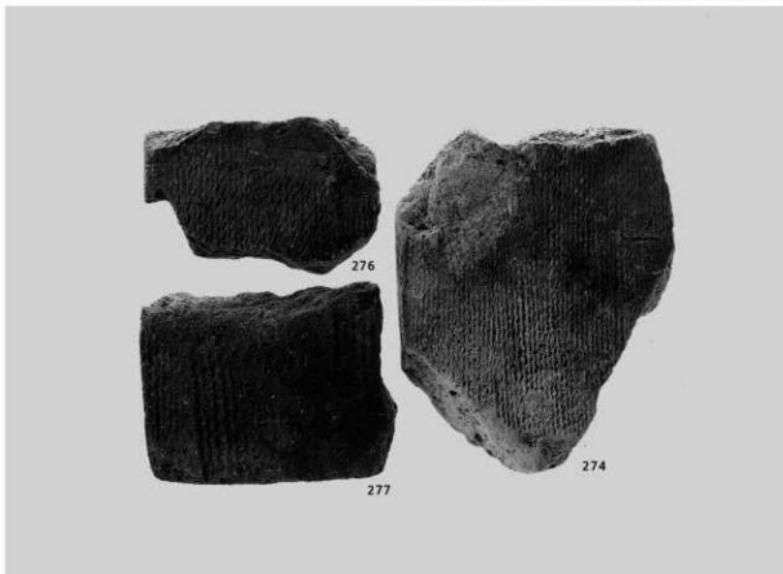


瓦類(3)

図版 4 8 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

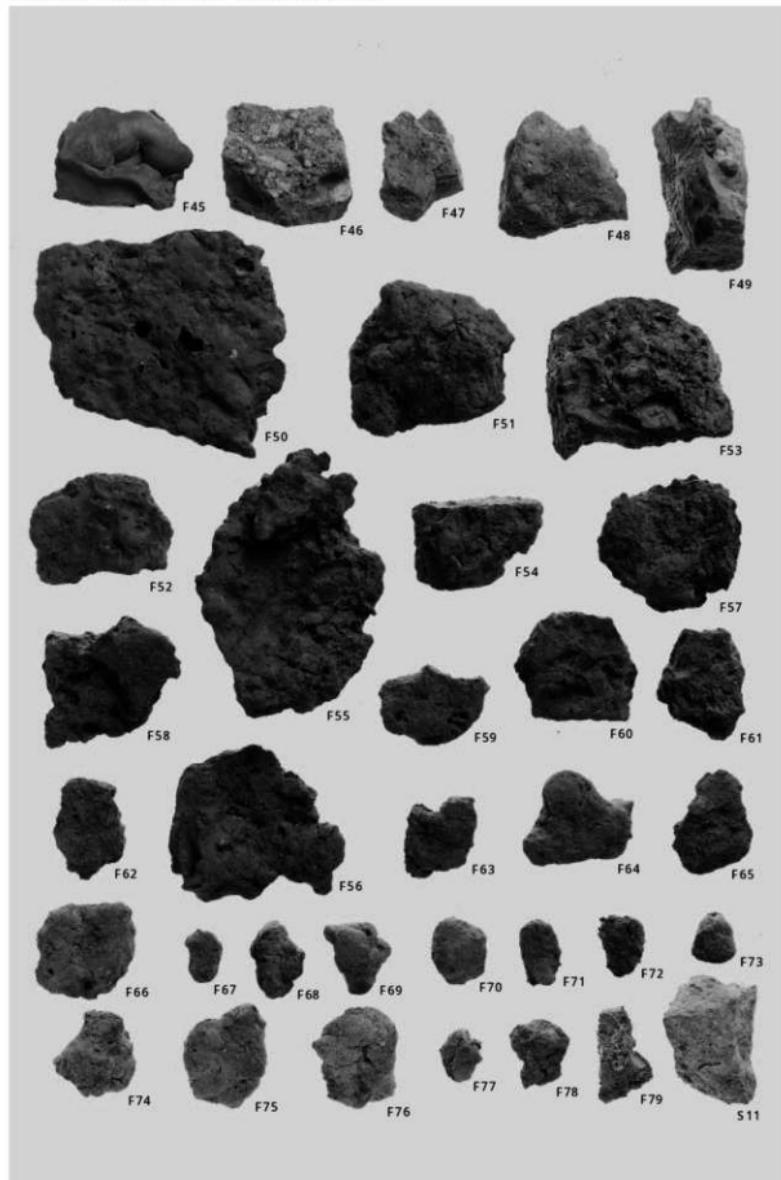


瓦類(4)

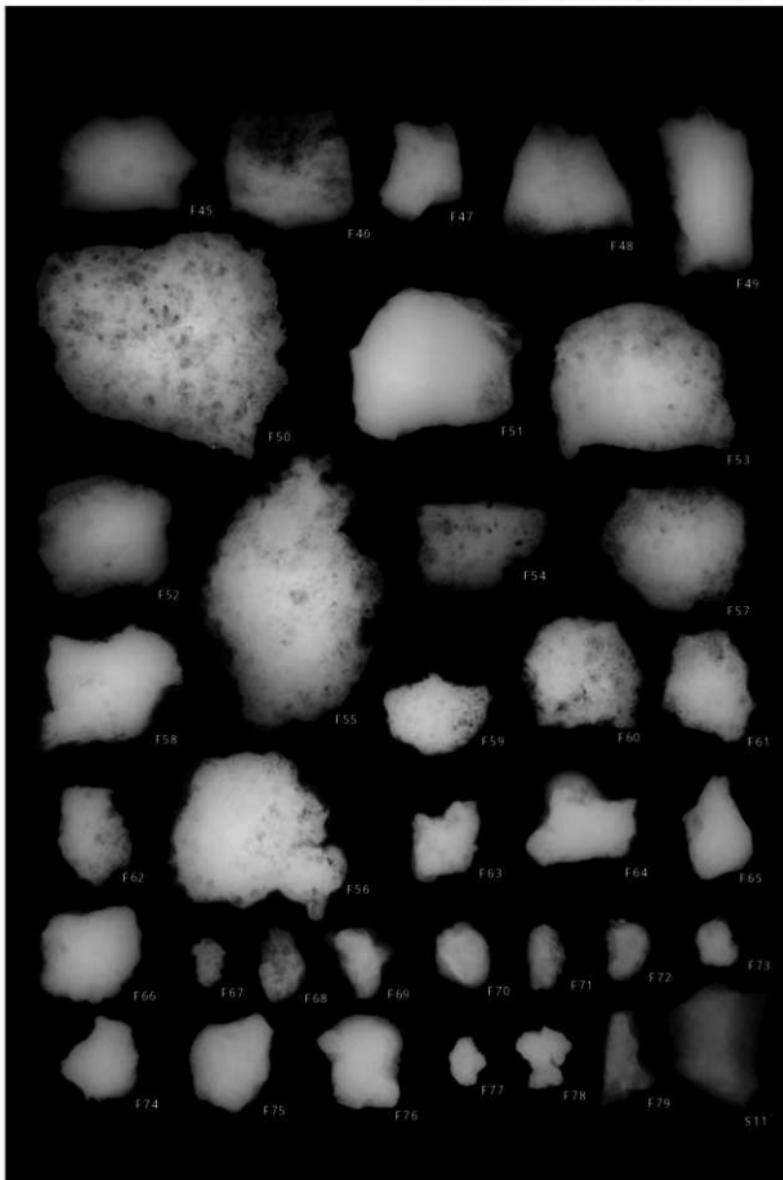


瓦類(5)

図版 50 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

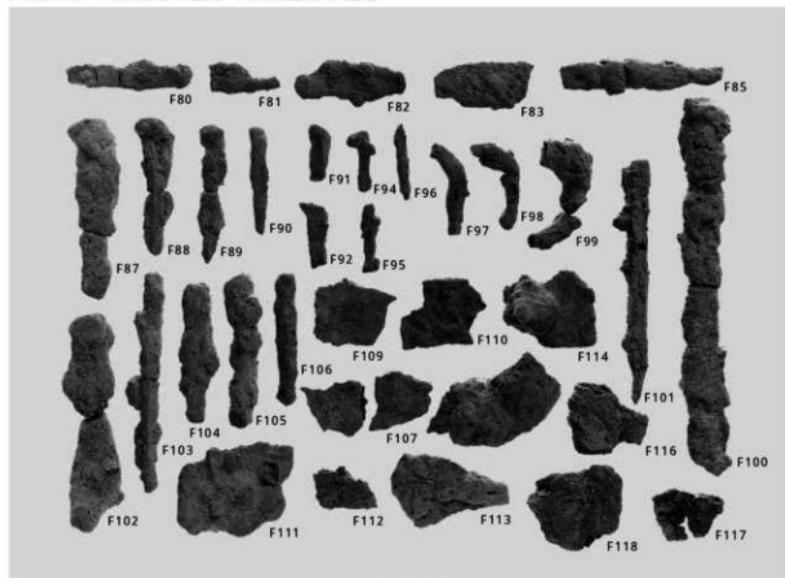


II層出土鍛冶関連遺物

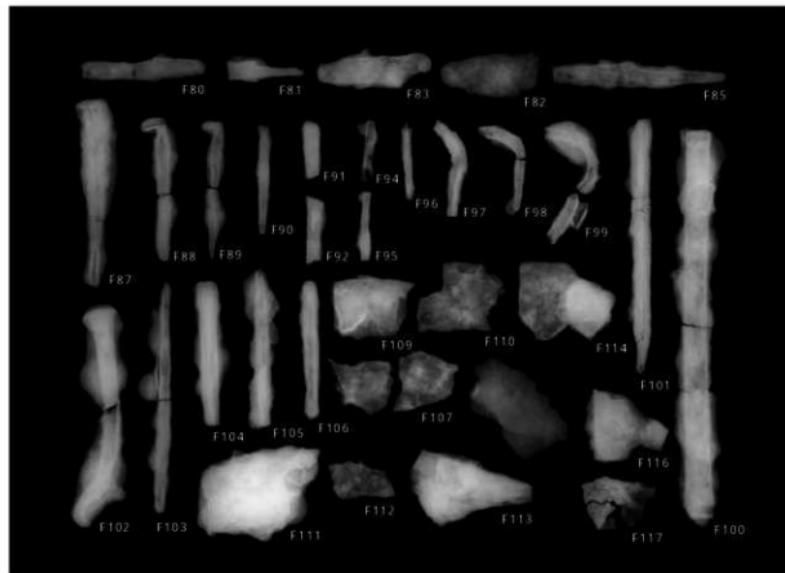


II層出土鍛冶関連遺物X線写真

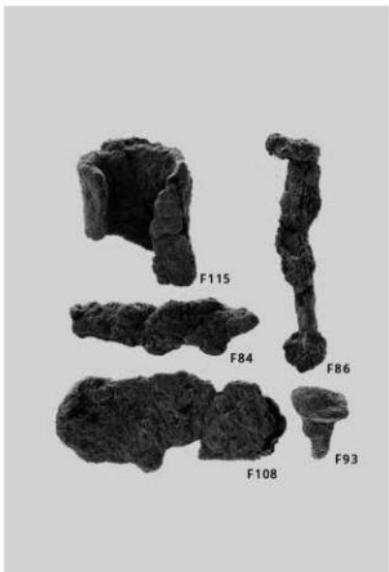
図版5.2 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡



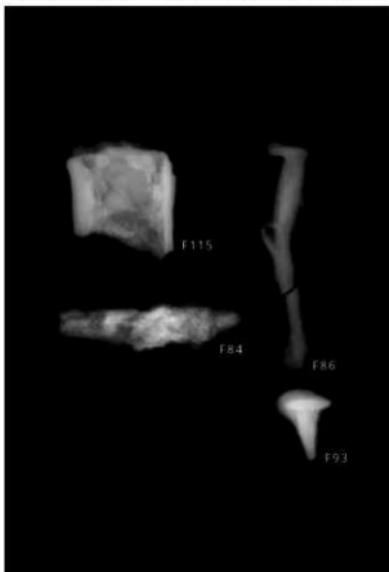
1. II層出土鉄製品(1)



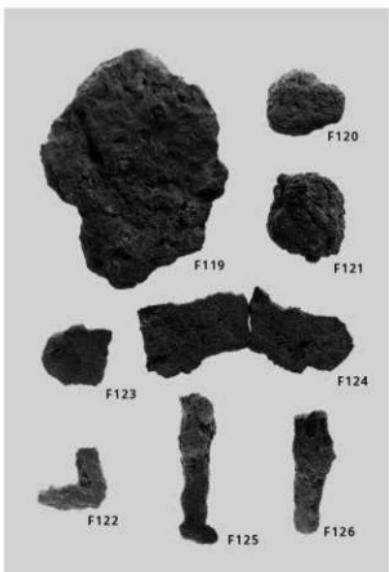
2. II層出土鉄製品X線写真(1)



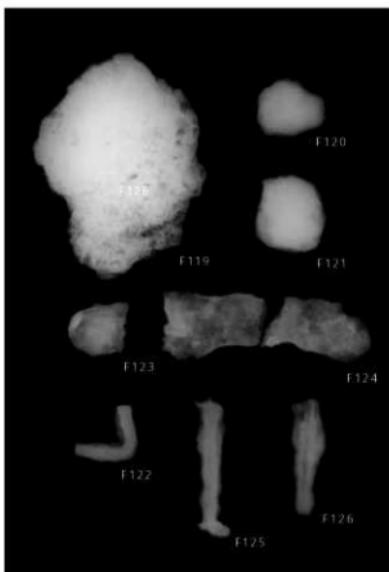
1. II層出土鉄製品(2)



2. II層出土鉄製品X線写真(2)

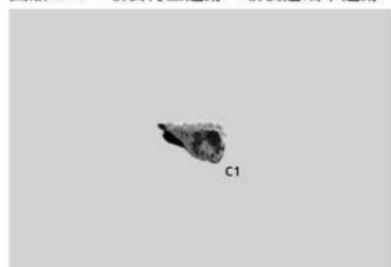


3. III・IV層出土鉄関連遺物(2)



4. III・IV層出土鉄関連遺物X線写真(2)

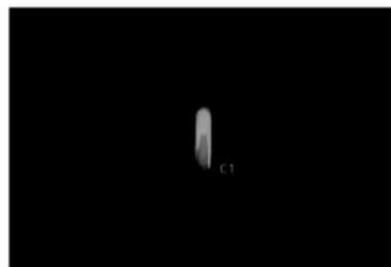
図版 5 4 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡



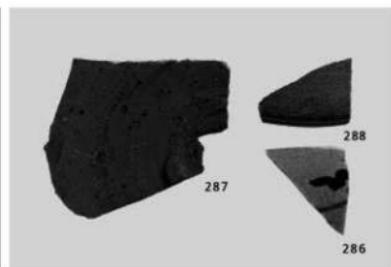
1. 青銅製品



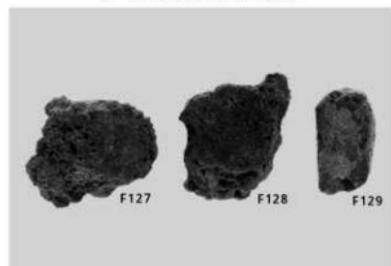
2. 青銅製品X線写真(1)



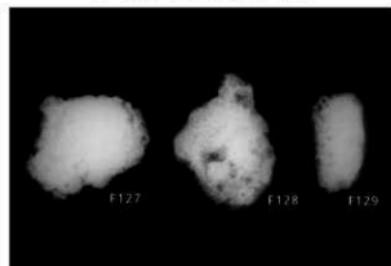
3. 青銅製品X線写真(2)



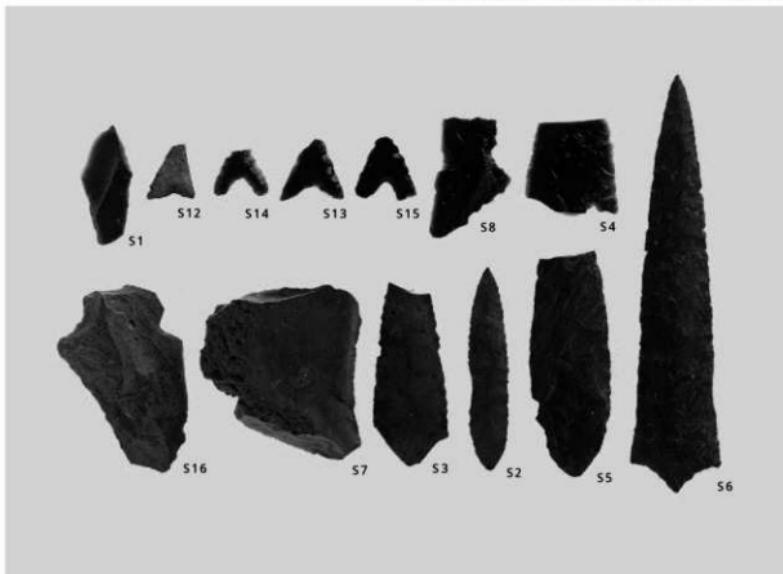
4. SK9・11出土土器・磁器



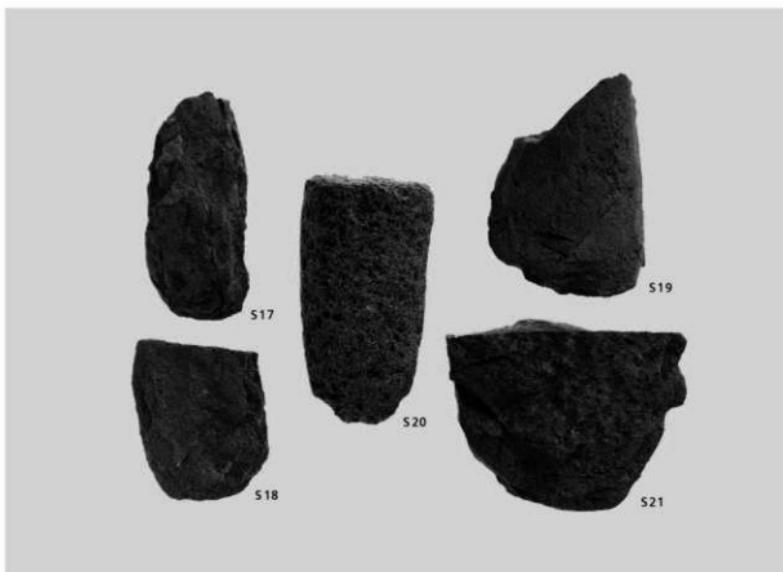
5. SD13・16出土鍛冶関連遺物



6. SD13・16出土鍛冶関連遺物X線写真

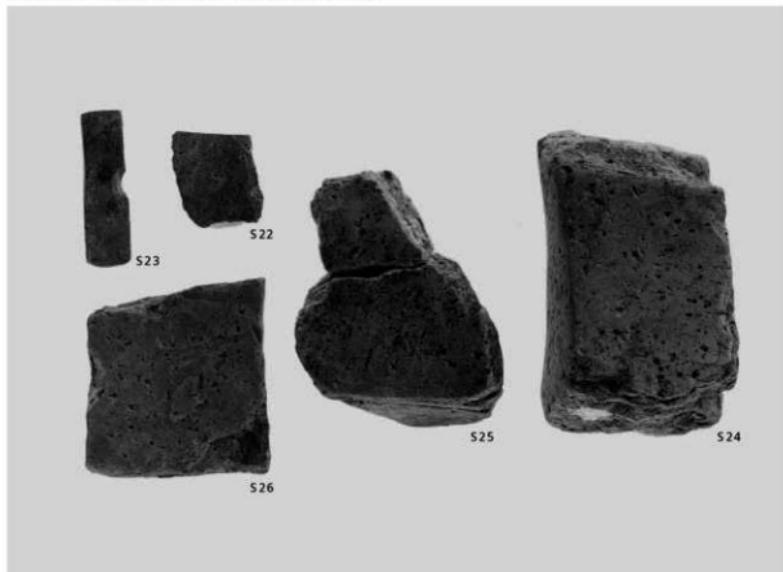


1. 旧石器時代～縄文時代草創期の石器

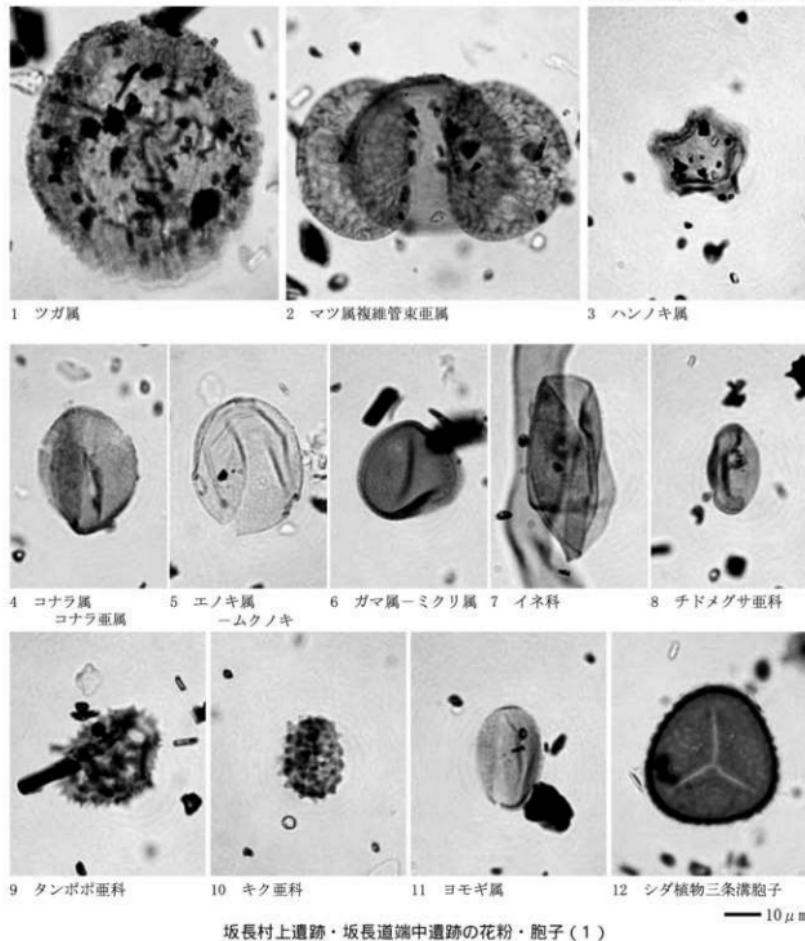


2. 石斧

図版 5 6 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

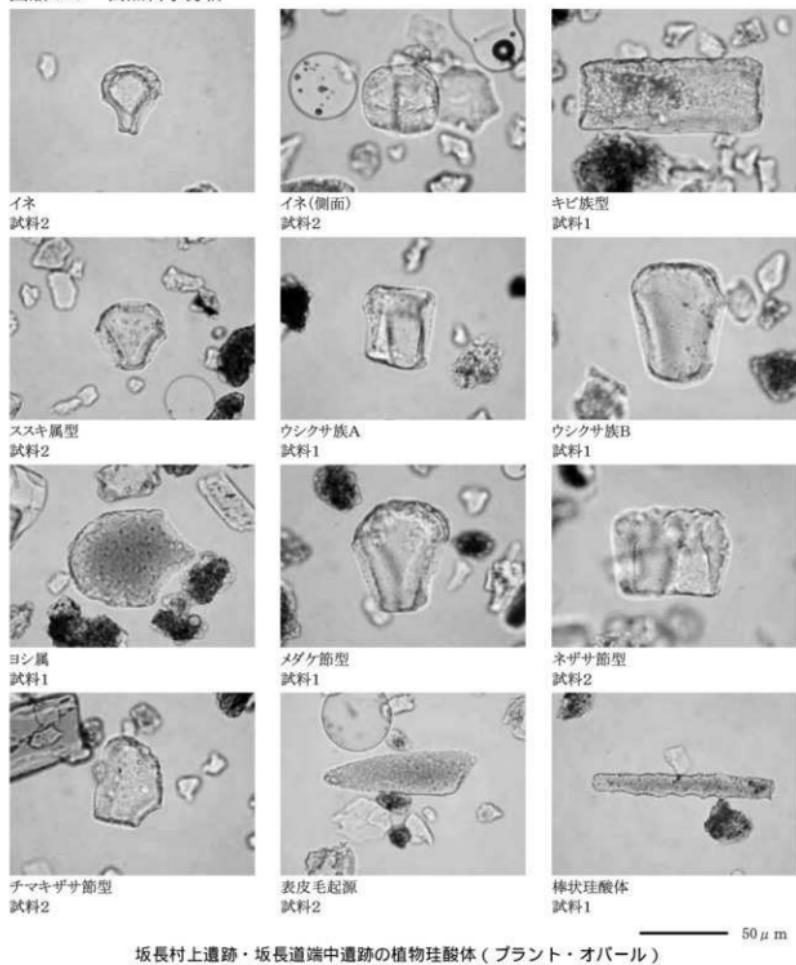


研石

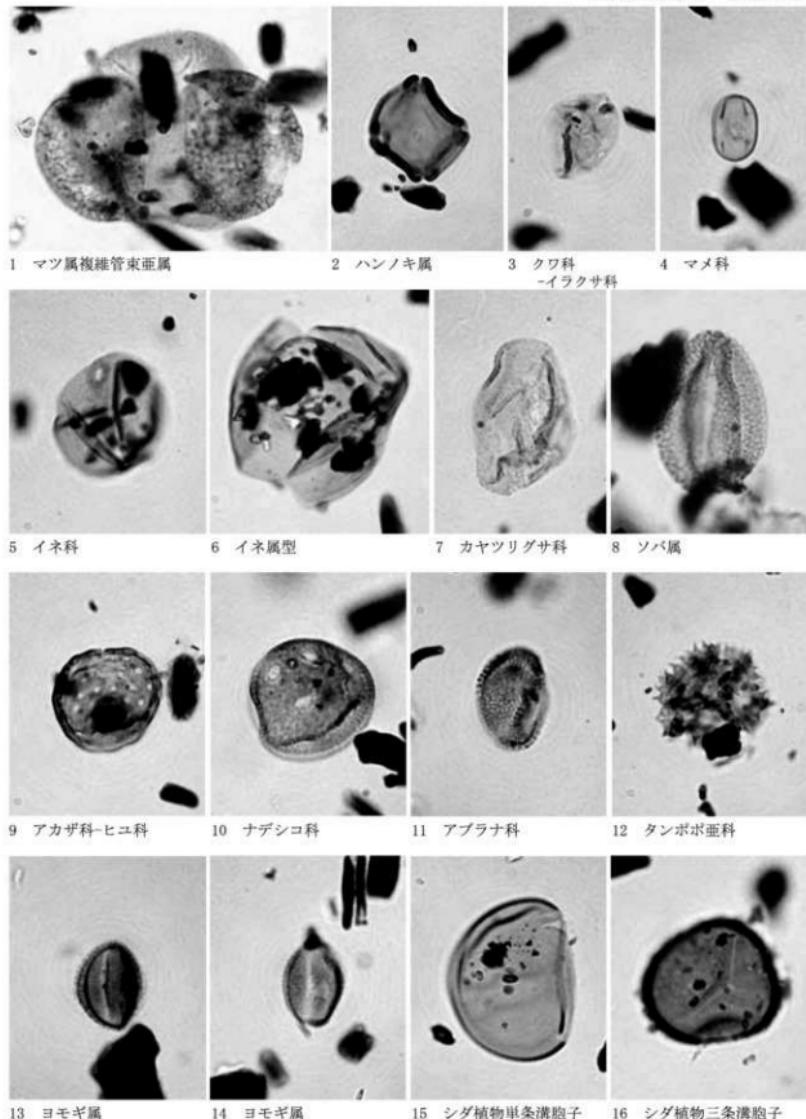


坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡の花粉・胞子 (1)

図版 5 8 自然科学分析



坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡の植物珪酸体（プラント・オバール）



坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡の花粉・胞子 (2)

— 10  $\mu$ m

# 報告書抄録

ふりがな	おおとのしものはらいせき・すわひがしどりばいせき・さかちようなごみちばたのかみいせき・さかちようむらかみいせき・さかちようみちばたのなかいせき
書名	大殿下ノ原遺跡・調訪東土取場遺跡・坂長米子道端ノ上遺跡・坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡
副書名	一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 一般県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
卷次	
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	108
編著者名	高橋 浩樹 高橋 章司 加藤 裕一 坂本 嘉和 河合 章行
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717
発行年月日	西暦2007年(平成19年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおとのしものはら 大殿下ノ原遺跡	鳥取県西伯郡伯耆町大殿下 字下ノ原2608番ほか	31390	1-364	35°23'00"	133°23'18"	20051110～ 20060117	650m <sup>2</sup> 一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事	
すわひがしどりば 調訪東土取場遺跡	鳥取県米子市調訪 字東土取場1564番ほか	31202	3-389	35°23'00"	133°23'20"	20051110～ 20060117		
さかちようなごみちばたのかみ 坂長米子道端ノ上遺跡	鳥取県西伯郡伯耆町坂長 字米子道端ノ上1086番ほか	31390	1-366	35°23'01"	133°23'17"	20050913～ 20051101		
さかちようむらかみ 坂長村上遺跡	鳥取県西伯郡伯耆町坂長 字村上1076番ほか	31390	1-367	35°23'00"	133°23'15"	20060414～ 20061130		
さかちようみちばたのなか 坂長道端中遺跡	鳥取県西伯郡伯耆町坂長 字道端中2403番ほか	31390	1-367	35°23'00"	133°23'13"	20060414～ 20061130		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大殿下ノ原遺跡 調訪東土取場遺跡	集落	古代	掘立柱建物跡	3棟	須恵器 土師器		大型の掘立柱建物跡を確認	
		古墳時代	竪穴住居跡	1棟	土師器			
坂長米子道端ノ上遺跡	集落	時期不明	掘立柱建物跡	1棟	須恵器 土師器			
			柵列	1基	瓦			
			土坑	5基				
坂長村上遺跡 坂長道端中遺跡	集落	旧石器～縄文時代			ナイフ形石器 尖頭器		ローム漸移層 から旧石器・ 尖頭器が出土	
		古代～中世	竪穴建物跡	2棟	須恵器 土師器	豎穴建物跡内 から鐵製繩・ 鏃先・鉄斧出土	豎穴建物跡内 から鐵製繩・ 鏃先・鉄斧出土	
			段状遺構	1基				
		近世	掘立柱建物跡	1棟	円面鏡 瓦			
			集石遺構	2基	鐵圓鍬遺物			
			溝状遺構	10基				
		時期不明	土坑	8基				
			溝状遺構	8基	須恵器 土師器			
			土坑	4基				

鳥取県教育文化財団調査報告書 108  
一般県道米子岸本線(坂長バイパス) 地方道路交付金工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県西伯郡伯耆町

おおとの しも の はら い せき  
**大殿下ノ原遺跡**  
さかちょうよ なごみちばた の かみ い せき  
**坂長米子道端ノ上遺跡**

鳥取県米子市

すわひがしどとりばいせき  
**諏訪東土取場遺跡**

一般県道米子岸本線(坂長バイパス) 改良工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡伯耆町

さかちょうむらかみいせき  
**坂長村上遺跡**  
さかちょうみちばたのなかいせき  
**坂長道端中遺跡**

発行 2007年3月31日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地

電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 中央印刷株式会社